

春秋・戦国・秦漢時代の都市の 構造と住民の性格

(研究課題番号 62510192)

平成元年度科学研究費補助金
一般研究(C) 研究成果報告書

平成2年3月

研究代表者 江 村 治 樹
(名古屋大学文学部助教授)

KAKEN

62510192

集

研究の目的

おおよそ春秋時代から漢代頃までの中国の社会は、都市を主要な基盤として成り立っていたと考えられる。すなわち、秦漢帝国成立へと向かうこの時代は、都市を場として展開したと言って過言でない。ところが意外にも、このようなこの時代の歴史の主要舞台である都市は、いまだ十分に解明されているとはいいがたい。確かに、国都などの大都市については、近年、研究が進んでいるが、大多数を占めたと考えられる一般地方都市の様態はほとんど明らかにされていないし、大都市についても、都市の性格を規定すると考えられる住民の在存形態はいまだ明らかにされていないと言ってよい。本研究では、近年発展をめざましい中国考古学の成果（遺構ならびに関連遺物、出土文字資料など）をも十分検討し、さらに文献史料もできるだけ利用しながら、この時代の都市一般の内部構造を、住民の動向をも視野に入れながら明らかにしようとするものである。そして、その地域性と時代性の比較検討を踏まえて、秦漢古代帝国の形成にかかわる問題を解明する手がかりを得たいと考える。

研究組織 研究代表者：江村治樹

研究経費	昭和62年度	900千円
	昭和63年度	500千円
	平成元年度	300千円
	計	1,700千円

- 研究発表** (1) 江村治樹「青銅礼器から見た春秋時代の社会変動」（名古屋大学文学部研究論集C I・史学34、1988.3）
- (2) 江村治樹「春秋時代青銅器銘文の書式と用語の時代的変遷」（名古屋大学文学部研究論集104・史学35、1989.3）
- (3) 江村治樹「戦国時代の都市とその支配」（東洋史研究第48巻・第2号、1989.9）

目 次

I 中国古代都市をめぐる諸問題	1
1 古代都市発達の時期	1
2 古代都市の内部構造	4
3 古代都市と秦漢帝国	6
II 戦国時代の都市とその支配	11
1 はじめに	11
2 戦国都市の分布と規模	12
(1) 考古学的遺跡による検討	12
(2) 出土文字資料による検討	14
(3) 文献資料による検討	18
(4) 都市の発達と交通路	22
3 戦国諸国家の都市支配	24
(1) 三晋地域の諸国家	24
(2) 周辺地域の諸国家	28
4 む す び	30
III 中国古代都市関係図表	39
1 西周・春秋都市遺跡表	40
西周・春秋都市遺跡ならびに国都分布図	43
2 (1) 戦国都市遺跡表	46
戦国都市遺跡分布図	57
(2) 戦国出土文字資料地名表	59
戦国都市分布図	69
(3) 戦国出土文字資料地名表・補	71
3 秦・漢都市遺跡表	74
秦・漢都市遺跡ならびに諸県分布図	83
漢代諸県置廃図	85
都市遺跡調査書目一覧	87
著録等略称一覧	88

I 中国古代都市をめぐる諸問題

1 古代都市発達の時期

『戦国策』趙策三によると、戦国時代の中原地域の都市について、「千丈の城、万家の邑あい望むなり」とある。これによって、この時代のこの地域には、一辺が千丈、すなわち2 km余の長さの城壁をもち、一万戸もの人口を擁する大都市が、互いに望見できるほどの近距離に散在していたことになる。また、『史記』蘇秦列伝には、戦国時代の齊都の様を述べて、「臨淄の中は七万戸。臣竊かに之を度るに、戸ごとに三男子を下らず、三七、二十一万なり。遠県を発するを待たずして、臨淄の卒は固より已に二十一万なり。臨淄甚だ富みて実ち、・・・臨淄の塗は、車轂撃ち、人肩を摩り、衽を連ぬれば帷と成り、袂を挙げれば幕と成り、汗を揮わば雨となる。家々殷んにして人々足り、志高くして気揚がる」とあり、その国都のにぎわいの様子をうかがうことができる。この他にも、この時代の都市の発達と繁栄を記す文献史料はいくつも見出すことができる。

この時代の都市の発展と繁栄は、このような文献史料だけでなく考古学的にも確認することができる。本報告のⅢ「中国古代都市関係図表」の2「戦国都市遺跡表」を見れば、上記の齊都・87臨淄故城は、外城と内城とからなり、外城壁は東西3318m、南北5209mもの規模の大都市であったことがわかる。その他、中山国の国都・7霊寿古城は東西4000m、南北4500m、趙都邯鄲の居住区である25大北城は東西3247m、南北4880m、韓都・57鄭韓故城は東西5000m、南北4500mあり、そして南方の楚都・102紀南城も東西4502m、南北3751mある。なかでも巨大なのは燕の国都・97燕下都で、東西の両城を合わせると、なんと東西9 km、南北4 kmにも達する。以上は国都であり、巨大なのは当然かも知れないが、その他の地方都市でも巨大なものが多く、同じく「戦国都市遺跡表」を見ると、城壁の一辺が2 kmを越えるものがかかり見られる。

そして、このことは前後の時代の都市遺跡と比較すればより明瞭になる。Ⅲ、1「西周・春秋都市遺跡表」によると、戦国時代の前の、西周時代、春秋時代の都市遺跡で、明らかに戦国時代には下らないと思われるものは絶対数自体少なく、また一辺が2 kmを越えるものも1白店古城、7陳城遺址、17季家湖古城の3例にすぎない。一方、下って漢代になると都市が縮小することは、すでに伊藤道治氏が指摘しているとおりである(1)。

氏によると、Ⅲ、2表の10侯馬の牛村古城、14禹王城、15古魏城、38東周王城などはすべて戦国時代の末から漢代にかけて縮小されたとしている。たとえば14禹王城を例にとると、この古城は大城、中城、小城の三つの部分からなるが、このうち東西3565m、南北4980mある大城は城内に漢代遺物もいくらか見られるものの、戦国文化層が広く分布していて戦国時代のもと考えられる(2)。ところが、東西1500m、南北980余mとかなり小さいその中城の方は漢代の遺物が豊富であり、主として漢代に使用された部分と考えられ、明らかに縮小しているのである。同じようなことは、38東周王城でも言える。この古城は外城、内城の二つの部分からなっているが、戦国時代に使用されたと考えられる外城が東西2890m、南北3000余mもあるのに対して、主として漢代に使用されていて河南県城と考えられる内城は、東西1460m、南北1400mに縮小している。そして、漢代にはこのように都市自体が縮小するのとならんで、全体的に見て都市の規模が小ぶりになっている。Ⅲ、3「秦・漢都市遺跡表」を見ると、秦漢時代に主として使用されたと考えられる都市遺跡の事例は戦国時代に比して遜色ないが(3)、一辺2kmを越える遺跡は8例と少なく(4)、全体的に見て一辺1km以下のものが多い。これは、確かに秦漢時代の都市遺跡の事例に遼寧省、内蒙古自治区、甘肅省、青海省などの辺境地帯の塞外防衛のための純軍事的な都市や防御施設が多いことにもよるが、中心部においてもあまり大きな遺跡は見当たらない。

以上によって、戦国時代にはとりわけ巨大な都市が多数発達したことが確認できたが、問題は正確にいつ頃からこのような都市の発達が見られ、いつ頃に衰退するのかと云うことである。このことは、都市自体の、ひいてはその住民の性格を考える上で重要であるが、実のところ考古学的な遺跡によっては十分確定しがたいのである。その原因は考古学的調査の不十分、不徹底によるところが大きい。Ⅲ、1～3の表には多数の都市遺跡の調査結果を示したが、その大部分は城壁の所在の確認と地表の遺物の分布調査というきわめて表面的なものに止まっている。また、都市の年代を判定する主要な遺物である陶器、瓦、磚などについても、その年代判定はきわめておおまかであり、東周、漢、あるいは細かくしても春秋、戦国、秦、前漢、後漢といった区分に止まっている。当然、これでは都市の発達と衰退の正確な時期を明らかにすることは困難である。

したがって、現在のところこの問題を深く追究することはできないが、ある程度の推

測は可能ではないかと思われる。まず、都市発達の開始の時期については、Ⅲ、2の表の「考古学的年代」の欄において、明らかに戦国時代に発達したと考えられる都市遺跡には多くの場合春秋時代の遺物を伴う点である。このことは、都市が戦国時代になって始めて急に発達するのではなく、発達の基礎は少なくともすでに春秋時代に形成されていたことを示している。では、それは春秋時代のいつ頃かという点、可能性としては中期頃が想定される。春秋中期には旧い氏族制的な秩序の解体という大きな社会変動が存在することがすでに指摘されており(5)、このことと都市の発達は大いに関係があるのではないかと考えられるのである。とりわけ、都市とのかかわりで注目されるのは、春秋時代における青銅器芸術の大きな変化である。このことは、すでに郭沫若氏によって指摘されているが(6)、拙稿「青銅礼器から見た春秋時代の社会変動」においては(7)、春秋時代における青銅器の変化の時期とその地域についてより詳細な検討を行なった。すなわち本論によって、春秋中期（前650年頃～前550年頃）において、青銅器の大形化とともに器形、文様、礼器組み合わせ、そして鑄造技術などに大きな変化が起こり、青銅器芸術の一つの大きな興隆期が形成されることが明らかとなった。そしてまた、この大きな変化は、やや南方に片寄るものの中原地域で先行的に起こったことも明らかとなったが、注目されるのは、この地域が本報告Ⅱ「戦国時代の都市とその支配」で論証したように、戦国時代に都市が発達する地域と重なっていることである。そしてさらに、この時代に流行する青銅器が、装飾過多で見栄えのする、宗教性の少ない成金趣味的な、農村的と言うよりはむしろ都市的であることも注目される。すなわち、春秋中期に中原地域において旧い氏族制的秩序が解体するとともに、そこから析出された人々の都市集住が進行し、新しい都市社会が形成される。そして、このような発展する新しい都市社会では、新興の都市住民によって見栄えのする新しい青銅器が要求されたと考えられるのである。

次に、その衰退期についてであるが、伊藤道治氏の指摘のごとく、はたしてその軍事的意味が少なくなる戦国時代の末に始まるのであろうか。個別の例はともかく、これを一般的な傾向とするには躊躇される。すでに、宇都宮清吉氏が『史記』や『塩鉄論』などによって指摘しているように(8)、前漢時代においても都市はなお発達し続けていたことは否定できないであろう。宇都宮氏は、武帝の対外政策にかかわる商人の没落と都市

の衰退を関係づけており、それも都市衰退の要因の一つであったことは十分考えられる。しかし、武帝の頃に都市の衰退が始まることは、文献的にも、考古学的にも確認は困難である。ただし、Ⅲ、3の「漢代諸県置廃図」によると、後漢の建武13年（後37）頃に廃止された県数は相当数にのぼり、後漢の初めには、県に編成された都市の衰退をうかがうことができる。これは周辺地域に顕著であるが、戦国時代に都市の発達した中原地域でも少ないながら見られ、この時期の都市の衰退は全体的な傾向であったことがわかる。しかし、前後漢交替期という動乱の時期ににわかに衰退したとは速断できない。なぜなら、前漢時代において辛うじて維持されてきた県制が、王朝の交替を期に一挙に廃止されたとも考えられるからである。ともかく、前漢時代にはすでに都市の衰退が始まっていたと考えた方が無難であろう。そして、その衰退の原因は、本報告Ⅱ、4「むすび」で述べたように、中央集権的な帝国という体制自体に内在していたのではなかろうか。

以上のごとく、中国の古代都市の発達は、この時代の基底の社会そのものに根ざし、漢という帝国の確立とともに衰退していったと考えられる。しかし、この点を推論ではなく事実によって確証するには都市遺跡に対するよりいっそうの考古学的調査の進展が必要であろう。

2 古代都市の内部構造

以上によって、春秋中期以後に発達する都市は、氏族制的秩序の解体後成立する新しい秩序の場としての性格を有していたことが予想される。しかし、そのような秩序とそれを支えた都市の住民の存在形態を明らかにするには、その内部構造が明らかにされる必要があり、それにはやはり都市の遺構を細部にわたるまで発掘することが不可欠である。ところが、中国における古代都市遺跡の発掘状況は、上述のごとくはなはだ不十分、不完全と言わざるを得ない。確かに、Ⅲ、2表の38東周王城、87臨淄故城、97燕下都のように長期にわたって継続して発掘され、遂一『文物』、『考古』といった雑誌に発掘簡報が掲載されている例や、80曲阜魯故城のように単行の大部な報告書が刊行されている例も存在する。しかし、比較的発掘報告が整っているこれらの場合でも、ほとんど遺物分布調査と部分的な発掘に終わっており、しかもほとんど計画的発掘が行なわれてい

るようには思われない。すなわち、道路や建築物の詳細な配置や形態など都市のプラン全体がわかるような発掘例はもちろん、それが部分的にでもわかる例すらないのである。これでは、インダス、メソポタミア、ギリシャ、ローマなど西方の古代文明の都市発掘調査と比べてはなはだしく見劣りがすると言わざるをえない⁽⁹⁾。確かに、中国古代の都市は木材と土壁が多用されていて、日干煉瓦、焼成煉瓦や石材など耐久性のある材料が多用されている西方の都市と比べて遺構の保存状態は必ずしも良いとはいえない。しかし、中国の都市発掘で継続的に行なわれているのはいずれも巨大都市であり、その上発掘に計画性がなくてはとうしようもないであろう。例えば、小規模な都市遺跡をモデルとして一つでも徹底的に全面発掘するほうが計画性のない大都市の発掘よりもより多くの成果が期待できるのではなかろうか。

このような考古学の現状では、都市の内部構造と住民の存在形態を明らかにするには自ずと限界がある。しかし、現状では当面このような不完全な発掘報告をもとに、その他の出土資料ならびに文献史料を総動員して考察していくよりしかたがないであろう。戦国時代を中心とする時代の都市発掘報告によれば、この時代の都市の内部は、一般に宮殿や官署の存在した統治区と、各種製作場や一般住民の住居のあった居住区に区画されていたことは明らかである。しかし都市の住民の性格を考える上で問題なのは、上述のように後者の居住区の個別の建築物の配置やその内部の様子がほとんどといってよいほど明らかでないことである。確かに、Ⅲ、3表の6 河南県城内では漢代の住居址が発掘されているが⁽¹⁰⁾、これはいまだ孤立した発掘例にすぎない。ただし、Ⅲ、2表の17 靈壽古城の場合は、道路や「市」などの建築物、各種製作場の配置だけでなくその相互の関連性まで明らかにされ、都市の内部構造をある程度までうかがい知ることのできる貴重な例である⁽¹¹⁾。発掘報告によると、この古城内の中央部、主に東城内に陶器、玉器、石器、骨器、鉄器の製作場の遺跡が発見されており、これらが相互に接続しあっているところから、これらは統一した管理下に労働力が集中され、分業化された官営の手工業製作場ではないかと考えられている。とくに、銅器と鉄器の製作場は55万㎡にも及び、東部に陶範製作場、南部に鉄器製作場、中央部に銅兵器製作場、北部に実用銅器製作場、そして西南部に「成白」直刀銭製作場が存在し、製作場の機能的な配置が行なわれていたことがうかがわれる。また、この古城内の中央部には版築の建築土台とともに大量の

瓦、瓦当、飾り瓦及び磚などが発見されており、しかもその遺跡中央部を東西に貫く幅約11mの大道が発掘されている。この道路は、西門と東門をつなぐ城内の主要道路と考えられ、この遺跡は城内の「市」ではないかとされている。これが事実ならば、遺跡上で確認された唯一の「市」の例となろう。

だが、この発掘報告によっても、各種製作場が官営かどうかの問題の他に、その技術者、労働者がどのように組織されて都市の中に位置づけられていたのか、また「市」がどのような機能を果たしていたのかなど、都市の住民の存在形態とかかわる部分は、文献史料によるのと同様、ほとんど明らかではない¹²。ただし、少なくとも、各種製作場や「市」が都市の中央部に配置されている点から、これらが都市にとって重要な機能を果たしていたことは想像できる。都市における各種製作場の重要性は、ある程度の規模を有するこの時代の他の都市遺跡においても同類の製作場が一般に発見されていることから確認される。一方、「市」についても、『史記』や『戦国策』、馬王堆帛書『戦国縦横家書』などに「市」のある都市が特別あつかいされている点から見て¹³、その重要性は疑いないであろう。これらのことは、戦国時代を中心とする都市が、生産と交易という経済的な側面を強く有していたことをはっきりと示している。そして、それは、拙稿「戦国三晋都市の性格」¹⁴や本報告のⅡ「戦国時代の都市とその支配」で強調したように、とりわけ中原地域の都市において、その住民の主体的、独立的なありかたと深くかかわっていたと考えられるが、その具体的な様態を解明するにもやはり将来の考古学的な都市遺跡の発掘の進展に期待せざるをえないであろう。

3 古代都市と秦漢帝国

秦漢古代帝国の形成過程をどのように捉えるかということは、今日まで日本における古代史研究の主要なテーマであり続けているが、その研究は、1960年代前半に、帝国形成の場の重視という視点を踏まえて最も深化されると考えられる。1960年代の初頭、西嶋定生氏は、国家権力は従来のように君主（皇帝）と官僚から考えるのではなく、君主と人民の関係で問題にすべきだとして、二十等爵制を手掛かりとして新しい秦漢帝国構造論を提示した¹⁵。氏によると、春秋時代以後、氏族制的秩序が崩壊した後、家父長的君主が出現する一方、自律的機能を失った里には個別化した人民が出現する。このよう

な個別化した人民を、家父長的君主が爵制的秩序により上から再編することによって成立してくるのが個别人身的、人頭的支配を行なう秦漢古代帝国である。ただし、このような支配はまず新しく設置された初県（新県）に局地的に形成されるが、一方では旧来の伝統的秩序を温存する県も存在し、その普遍化は当初から限界があったとしている。これに対して、増淵龍夫氏は、これを自律的秩序機能の喪失を前提とする「動きのとれない構造論」と批判し、氏族制的秩序の崩壊後、民間には自然に土豪、豪族の自律的秩序が形成されたはずで、秦漢帝国はこのような秩序を制度的機構の中に包摂していくものとしてとらえねばならないと主張した¹¹⁰。この両者にとって重視されているのは、ともに在地社会の秩序の問題であるが、その理解の仕方には大きな差があることは明白である。しかし、その在地社会の捉え方にも共通した部分があることにも注意すべきである。すなわち、西嶋氏は新県以外に伝統の残存する県（旧県）の存在を認めたが、増淵氏も旧県に特徴的な土豪、豪族の自律的秩序に春秋以来の共同性の残存を認めているのである¹¹¹。両者にとって、旧県は古い遺制を多く残すまさに旧い県であり、帝国とは矛盾する独自の存在として捉えられているのである。ただし、両者は新県と旧県という二つの地域を区分してはいるが、そのより個別具体的な地域性はいまだ問題としていない¹¹²。

この新県と旧県の問題について、地域的により具体的に検討したのは木村正雄氏である¹¹³。氏は、個々の県の成立過程や置廃などを綿密に検討することによって、春秋時代の邑に由来する農業上自立性の高い旧県（第一次農地）と新しく開拓された中央依存性の強い新県（第二次農地）の分布状況の解明を進めた。その結果、華北では中原地域に自立性の高い県が多く、その東、北、西の周辺地域では中央依存性の強い県が多いことを明らかにした。そして、後者のような新県が中央集権的な秦漢古代帝国の基礎となったと結論づけた。ただし、旧県の方は戦国以後、父老的大土地所有が進行して父老的局地秩序が成立し、中央権力に対して独自の在り方をするようになるとし、西嶋、増淵両氏と同じような位置づけをしている。

その後、1960年代末頃からは、新県、旧県という視角とは異なる、具体的な地域性を考慮した様々な方向からの秦漢帝国形成にかかわる研究が行なわれるようになる。まず、太田幸男氏は一連の論文で、田齊と秦の社会形態の相違を検討することによって秦漢帝

国の形成の問題を論じている²⁰。氏によると、田斉を代表とする東方六国は、家父長制の進展によって中央集権体制は確立せず、自己崩壊したとみなす。それに対して、秦では、邑共同体組織の存続する後れた体制であったため、商鞅の改革が成功して中央集権体制が確立し、天下を統一することが可能となったとしている。また、古賀登氏は、先進的な中原諸国は奴隷制の矛盾が解決されず、抜道のない袋小路に入ってしまったのに対して、秦は後進地であったため、商鞅の改革が成功してその矛盾が解決されたとしている²¹。氏のこの考え方は、進んだ東方諸国と後れた秦という対比を設定した太田氏の考えときわめて近似している。この他、好並隆司氏は、秦漢帝国の体制について、庶民における農耕民的「デモクラシー」の世界で分権的な東方諸国と、君主権における北方遊牧民系の専制主義をとる秦との階級支配的統合制とみなしている²²。やはり氏も、東方諸国は統一政権を生み出しえない社会と捉え、帝国とは「対峙」「葛藤」する矛盾対立する存在と考えているようである。

要するに、秦漢帝国の形成について、地域的な場を重視する従来の立場において特徴的なのは、新県と旧県、あるいは秦と東方諸国というように相矛盾する二者対立を想定する点であり、そして、旧県あるいは東方諸国という古くから発達した地域を、秦漢帝国にとって否定的存在とみなす傾向がある点である。そこでまず問題となるのは、木村氏のような個別的、具体的な地域性を重視した研究もあるものの、一般に東方諸国を全体として一つにあつかっている点である。これは、秦に比べて、東方の諸国にかかわる文献史料の絶対量が乏しいためでもあるが、この地域を一つの均一な地域としてあつかうことができないことは、上記の木村氏の研究によっても明白であろう。次に問題となるのは、旧県の多い地域、あるいは東方地域の中で古くから発達していた地域が、はたして秦漢帝国の体制の在り方そのものを規定した可能性はなかったかという点である。一般的に言って、社会的、経済的に発達した地域において、より先行的に新しい政治体制が形成される可能性は高いのではなかろうか。

このような秦漢帝国形成にかかわる問題状況の中で、それに対する都市によるアプローチはどのような視角を提示できるのであろうか。まず、その時代、実際に人々が生きた都市という具体的場を設置すること自体意味があろう。そして、その場としての重要性は都市も農村も変わらないと思われるが、とりわけ都市の方は、本章第1節や本報告Ⅱ

で検討したとおり、秦漢帝国のまさに形成期である戦国時代に、さらにその時代における世界の中心部であった中原地域において発達している点、無視できない重要性があるように思われる。そして、このような中原地域の都市が、秦漢帝国の体制の在り方そのものを規定しはしなかったであろうか。では、発達した中原地域の都市はいかにして秦漢帝国の体制の在り方を規定したのでであろうか。それは、私見では郡県制的な官僚制ではないかと考える。より正確に言えば、その体制を中心となって支えたのは、主として中原地域の発達した都市社会から生起してくる官僚ではなかったかと考えられるのである。すなわち、氏族制の解体後、新しい秩序の場としての都市社会の中から、新しい秩序の形成者、あるいは支配階層として官僚の原型が形成されてくるのではなかろうか。このことは当然都市の住民の動向を踏まえて考える必要があるであろう。そして、そのためには、やはり住民の存在形態を視野において都市の内部構造を明らかにする必要があるが、これに係わる問題点は前節で述べたとおりである。

注

- (1) 「先秦時代の都市－その一、考古学的に見た都城－」（研究30、1963）。
- (2) 陶正剛、葉学明「古魏城和禹王古城調査簡報」（文62－4・5）。
- (3) 現在のところ、Ⅲ、2の表によれば戦国時代を中心に栄えた都市の遺跡は141例確認できるが、Ⅲ、3の表の秦漢時代の都市遺跡も131例と近接している。
- (4) Ⅲ、3の表によると、5 漢魏故城、16温県古城、26宛城址、32曲阜漢城、55右北平郡址、77 漢長安城、86丹鳳県古城、130 雒陽の8例。ちなみに、Ⅲ、2の表によると、戦国時代では一辺2 km以上の遺跡は29例にのぼる。
- (5) たとえば、増淵龍夫「左伝の世界」（『世界の歴史3 東アジア文明の形成』1968新版、筑摩書房）。
- (6) 郭沫若『十批判書』（1954、人民出版社）。
- (7) 名古屋大学文学部研究論集C I（史学34）、1988。
- (8) 「西漢時代の都市」（『漢代社会経済史研究』1960、弘文堂書房）。なお、氏も取り上げているが、『史記』悼惠王世家には「臨淄十万户」とあり、司馬遷の頃の臨淄の人口は戦国時代より多くなっている。
- (9) 例えば、ローマ時代のポンペイなどは遺跡保存という点で幸運に恵まれたとは言え、その都市プランとともに建築物内の細部まで明らかとなり、当時の住民の生活様態まで具体的に蘇らせることができたのは19世紀中頃以来の地道な発掘による。しかし、それでもまだ二割は未発掘だということである（金子史朗『ポンペイの滅んだ日』1988、原書房）。
- (10) 郭宝鈞「洛陽西郊漢代居住遺跡」（考通56－1）。
- (11) 陳応祺「略談靈壽古城址所反映中山国的幾個問題」（三次年会）。

- (12) 87臨淄故城や116咸陽故城などの出土の陶文は、都市内の陶工の組織の問題を考える上で重要な材料であるが、後者を含む秦漢の陶文研究は、最近、佐原康夫「秦漢陶文考」(古代文化41、1989-11)などで進められているが、前者の解明はあまり進んでいない。
- (13) 佐原康夫「漢代の市について」(史林68-5、1985)。以上の文献史料には、「市」のある都市は「城市邑」「小県有市者」などのように表現されている。
- (14) 名古屋大学文学部研究論集XCV(史学32)、1986。
- (15) 『中国古代帝国の形成と構造』(1961、東大出版会)。
- (16) 「所謂東洋的専制主義と共同体」(一橋論叢47-3、1962)。
- (17) 「春秋時代の社会と国家」(『岩波世界歴史4』1970、岩波書店)。
- (18) 氏は、「漢代郡県制の地域的考察 その一—大原、上党二郡を中心として」(『中国古代史研究』1960、吉川弘文館)においてすでに具体的な地域研究に着手しているがその後継続されていない。なお、ここでもすでに、秦漢時代でも古い族的秩序は破砕されず、その遺制は土豪、豪族という形をとって、形を変え、意味を変えて生き残っているとしている。
- (19) 『中国古代帝国の形成—特にその成立の基礎条件』(1965、不昧堂書店)。
- (20) 斉の田氏について—春秋末期における邑制国家体制崩壊の一側面」(歴史学研究350、1969)、「田斉の成立—斉の田氏について・その二」(『中国古代史研究4』1976、雄山閣)、「田斉の崩壊—斉の田氏について・その三」(史海21・22、1975)、「商鞅変法の再検討」(歴史学研究別冊特集、1975)、「商鞅変法の再検討・補正」(歴史学研究483、1980)。
- (21) 「尽地力説攷—戦国魏の李悝の経済政策」(『漢長安城と阡陌・県郷亭里制度』1976、雄山閣)、「中国古代史の時代区分問題と睡虎地出土の秦簡」(同上)。
- (22) 「中国における皇帝権の成立と展開」(思想1978-2)。

Ⅱ 戦国時代の都市とその支配

1 はじめに

戦国時代を中心とする時代は、都市が大いに発達した時代であることは異論がないところであろう。しかし、この時代の都市の性格については、大きく分けて二つの相対立する見方が存在する。

その一つは、宇都宮清吉氏を代表とする見方であり、この時代の都市の発展に対して経済的な要因を重視する見方である。宇都宮氏は、「西漢時代の都市」(1)において、前四、三世紀の中国にはすでに世界経済圏が成立していたとみなし、それを成立させたのは共通貨幣としての黄金と世界交通路の成立であったとしている。そして、この交通路にそって都市が発達し、前三世紀から前二、一世紀には農村人口六割に対して、商工民を中心とする都市人口は三割に達していたと予測している。すなわち、氏によると、戦国時代から前漢時代にかけての都市の発展は、世界経済圏の成立という純粋に経済的な要因によるものであり、都市の住民も商工民が大部分を占めていたとされるのである。

このような古代都市に対する見方は、他の日本の研究者の中にも見られるが(2)、むしろ中国の研究者に一般的である。楊寬氏は、すでに『戦国史』の旧版において(3)、春秋戦国の間に農業、手工業生産の発展によって商品経済の発展が起こり、それにともなって各国に大商業都市の発達と人口の都市集中が起こったとしている。このような見方は、近年ではさらに一般化している。俞偉超氏などは、戦国から前漢時代にかけて、農業、手工業、商業の新しい発展と分業化の進行によって新しい都市が形成され、全人口の三分の一以上が都市に集中していたと予想している(4)。また、張鴻雁氏も、戦国時代の都市は大体商工業都市で、その人口は全人口の20パーセントを占めていたとみなしている(5)。この他の中国の研究者も、この時代の都市を経済的な要因によって発達した商工業都市とみなす点では共通しているようである(6)。

これに対して、この時代の都市の発達に対して経済的な要因を第一義的なものとみなさない考え方が存在する。それは、上記の宇都宮氏の見方に対する批判として出された宮崎市定氏の見解である。氏は、「戦国時代の都市」(7)において、戦国時代に都市の発達を認めるものの、それを一律に経済の発展と結びつける前に、中国の歴史上にいかな

る位置を占め、いかなる意義を有するかを考える必要があるとする。そして、結局、中国古代の城郭都市の本質は商工業都市ではなく農業都市であり、「戦国時代における大都市の発達、純粋に経済的な原因によるものではなく、最も多く政治的、或いは軍事的な理由による繁栄であった」と結論づけている。さらに、氏の言葉を引用すれば、「戦国時代に中国の都市と商業は著しい発達を遂げたが、それは一面甚だ人為的且つ不自然な、またアンバランスなもの」であり、「主として政治的な中央集権政策の強行によって生じたもので、首都もしくは一、二の重要な軍事都市に限られており、大多数の地方都市は依然として、むしろ微力な農業都市に止まっていた」とも述べている。そして、この時代の都市の規模については、首都やこれに準じる都市は大都市として発達したが、一流都市で万戸、二流都市で千戸、その他はおおむね二、三百戸というのが普通であったとしている。

このような見方は、その後多くの日本の研究者に受け継がれており、伊藤道治氏はこの説を考古学的な材料によって補強しており⁽⁸⁾、影山剛氏もこの見解をそのまま承認してこの時代の商工業について論じている⁽⁹⁾。また、近年でも、この時代の都市の発達に政治的、軍事的な要因を重視する考え方は、池田雄一氏⁽¹⁰⁾、五井直弘氏⁽¹¹⁾、佐原康夫氏⁽¹²⁾などの都市論に見られるが、上述の宇都宮氏のような見方はむしろ少数であるといってい

てよい。

では、このような相対立する見方はいかにして生じてきたのであろうか。また、いずれの見方が歴史的に正しいのであろうか。近年、古代都市に関する考古学的な遺跡、遺物の発見が豊富になり、このような問に対しても一定の解答を与えることができるようになってきたと思われる。わたしは、先に「戦国三晋都市の性格」⁽¹³⁾によって、主として三晋地域の都市に限定して、考古学的な見地からこの時代の都市の性格について考察したが、ここでは、その対象を全中国に拡げて考えてみたい。

2 戦国都市の分布と規模

(1) 考古学的遺跡による検討

Ⅲ「中国古代都市関係図表」の2-(1)「戦国都市遺跡表」は、1990年1月の段階で実見することのできた報告書⁽¹⁴⁾にもとづいて、戦国時代を中心とする都市遺跡の所在地と

規模を表にしたものである。この表のほとんどの遺跡は、時間的に前の春秋時代、あるいは後の漢代にもわたるものであるが、出土遺物から戦国時代を中心に存在したと考えられるものを取り上げた。この表では、かなり零細な発掘報告を含めて141例の都市遺跡を確認することができる。

上の表にもとづいて、一定範囲内の都市遺跡の位置と規模を示したものがⅢ、2の「戦国都市遺跡分布図」である。この地図では、遺跡の規模を城壁の最大長辺で示した。凡例の「一辺2 km以上」、「一辺2 km未満1 km以上」とは、それぞれ城壁の最大長辺が2 km以上、2 km未満1 km以上ということである。中国の考古学の報告書では、城壁の形態を示す図面を掲載し、その各部分の寸法を明記したものはあまり多くない。図面を載せずに東西、南北の城壁の長さのみ記すもの、あるいは城壁の全長（周長）のみを記すものや、さらに遺跡の面積のみを記すものなど、きわめて簡略な報告が多い。このような報告書の状況では都市遺跡の規模の正確な比較は望みようはないし、また不可能である。分布図で都市の規模を最長辺のみで示したのは、このような資料の状況による。確かに、城壁は必ずしも直線的ではなく、かなり複雑に屈曲したものもある。また、都市の形が正方形に近いものと長方形のものとは、当然その規模は異なってくる。だが、これも一辺を1 km、2 kmというように大きく区分した場合には、それぞれの境界部分を除いて、実際の規模を大きく外れることはないと思われる。なお、周長のみしかわからない場合はその四分の一を一辺の長さとし、面積のみの場合はその平方根を一辺の長さとして仮定した。

2-(1)「戦国都市遺跡表」のうち「戦国都市遺跡分布図」には129例の都市遺跡を挙げたが、うち22例は報告書に規模の記載がなく、残る107例が一応規模のわかるものである。うち一辺が1 km以上のものは62例あり半数を越える。そして、そのうち一辺が2 km以上のものは29例もある。2 km以上のものには、国都を多く含み、とりわけ4 kmを超えるものは戦国時代の大国の首都がほとんどである。14禹王城はもと魏の首都、17靈寿古城は中山、25大北城は趙、57鄭韓故城は韓、87臨淄故城は齊、102紀南城は楚の首都であり、一辺が9 kmに達する97燕下都は燕の首都である。したがって、一国の首都がきわめて巨大であったことを強調する宮崎氏の考えは誤ってはいないと考えられる。

また、戦国時代に巨大都市が形成されたことも、都市遺跡の規模から見て間違いない

ようである。現在、西周から春秋時代のものと考えられる規模のわかる都市遺跡は18例確認できるが、一辺が1 kmを越えると思われるものは3例にすぎない⁹⁹。一方、秦漢時代で規模のわかるものは102例確認できる。このうち一辺1 km以上のものは27例あるが、一辺2 km以上のものとなると8例と少なくなる¹⁰⁰。現在確認できる秦漢時代の都市遺跡は、遼寧、内蒙古、青海など辺境の小さな軍事的都市を多く含んではいるものの、伊藤道治氏がすでに指摘しているごとく¹⁰¹、漢代になると都市が縮小することは確かなようである。戦国時代には確かに都市の爆発的発達があったと考えてよいであろう。

次に、「戦国都市遺跡分布図」によって都市遺跡の分布傾向を見てみると、明らかに遺跡の集中しているいくつかの地域が見出される。特に集中の著しい地域は河南省中央部である。31共城以南、67呉房故城以北、37宜陽古城以東、126 雍丘故城以西の東西、南北それぞれ250 km前後の範囲内に42の遺跡が集中している。そして、この範囲内には一辺2 km以上の遺跡9、一辺2 km未満から1 km以上の遺跡14を含み、1 km以上のものが半数を越える。とりわけ、巨大都市の集中度の高い地域は、現在の洛陽、鄭州の周辺であり、一辺1 kmを越える遺跡が直線距離で大体40 kmから20 kmの間隔で散在している¹⁰²。この地域以外にも、山西省南部、山東省東部、淮水上流、そして太行山脈ぞいに遺跡の集中した地域が認められるが、この地域に比しうるのは山西省南部のみであろう。

だが、このような都市遺跡の分布のみによって、戦国時代に河南省中央部にのみ顕著な都市の集中的発達が起こったとは速断できない。実のところ、現在の中国における都市遺跡の調査の進行程度には明らかに精粗があるのである。遺跡の最も集中している河南省は、全国的に見て遺跡の一般調査はかなり進んでいるが、他の地域はそれほどでもない¹⁰³。「戦国都市遺跡分布図」のごとく、河南省中央部が都市の集中して発達した地域であったことはまず間違いないであろうが、他に同じように都市の集中発達した地域がなかったとはいえない。したがって、都市の分布や規模に関しては、他の材料によって検討してみる必要がある。

(2) 出土文字資料による検討

戦国時代になると、貨幣や銅器、漆器、陶器などの器物に地名を鋳込んだり、刻したりした銘文が多くなる。こうした地名は、その器物を使用する場所を示す場合もあるが、

多くは製造した場所を示す²⁰。したがって、器物に附された地名によって、その製作場の所在地を知ることができる。そして、このような製作場の所在地は、単なる農業を中心とする集落ではなく、多くの場合、ある程度の経済力を有する都市であったと考えられる。とりわけ、貨幣や銅器を鑄造したところは相応の都市であった可能性が高い。貨幣を含めた銅器の鑄造には、青銅の材料の調達と溶解、鑄型の製作と実際の鑄造など、高度の技術と分業化が必要であり、それを可能とする経済的基盤が必要とされたと考えられる。そして、中でも貨幣の場合は、それを発行するには、その信用を支えることのできる経済力が不可欠であったと考えられる。実際に、貨幣や銅器を製造したのが都市であったことは、都市遺跡との関係でも証することができる。現実の都市遺跡の内部にそうした製作場の遺跡が発見されており、また都市遺跡が比定されている地名と同一の地名が貨幣や銅器にも見られる場合がかなりあるのである²¹。したがって、この時代の器物、とりわけ貨幣や銅器の地名を検討することによって、都市の分布をある程度推定することも可能ではないかと考えられる。

Ⅲ、2-(2)「戦国出土文字資料地名表」は、貨幣、銅器、漆器、陶器などに附された製造地を示すと考えられる地名の中で、位置を比定することのできるものの一覧表である。そして、この表の地名の比定地と前出の「戦国都市遺跡分布図」の都市遺跡の位置とを重ね合わせたものがⅢ、2の「戦国都市分布図」である。

地名を有する器物で最も地名の種類が多いのは貨幣である。戦国時代には、様々な形態の貨幣が国や都市で発行され、その大部分に地名が鑄込まれている²²。なかでも、三晋地域を中心として流通したとみなされる尖足布と方足布に鑄込まれた地名の種類は非常に多い。鄭家相『中国貨幣発展史』²³によると、前者の地名は31種類、後者の地名は66種類にのぼる。このような貨幣に鑄込まれた地名は、その貨幣を発行した都市を示していると考えられるが、これらすべてが都市の分布を考える材料として使えるわけではない。

問題の一つは銘文の読み方に異説があるものがあること、もう一つは、読み方に問題がなくても、地名の比定が困難なものがあることである。たとえば、𠄎字を鑄込んだ方足布は、鄧と読んで陝西省鄧県とする説、豊と読んで陝西省山陽県とする説や、鑄（＝注）と読んで河南省臨汝県東南とする説などがある²⁴。この貨幣は、前二者とすると秦のものとなり、後者とすると韓のものとなる。また、方足布 𠄎 も読み方が大

きく分かれる貨幣である。齊貝と読んで齊の貨幣とする説、貝丘（＝沛丘）と読んで山東省博興県東南とする説、楡と読んで山西省楡次市とする説があり、さらに兪、文貝、丘貝などと読む説もある^㉞。このように、銘文の読み方に異説があるため地名比定が困難な貨幣はかなりの数にのぼる^㉞。もう一つの、読み方には問題がないが地名比定が困難なものの典型的な例として「安陽」方足布がある。この貨幣について、鄭家相氏は「安邑の陽」と理解して山西省夏県西北とするが、王毓銓氏は河北省臨城県南とし、また山東省曹県東とする説もある^㉞。その他、文献史料に同一地名が各地にいくつも現れる場合や^㉞、文献史料に全く現れない場合も地名の確定は困難である^㉞。

このように、貨幣の地名比定には多くの問題があるが、2-(2)「戦国出土文字資料地名表」や「戦国都市分布図」では、まず読み方に問題がなく、地名比定にも異説がないものを中心に挙げた。そして、地図上の位置は、地名考証のいきとどいていると考えられる譚其驤主編『中国歴史地図集第一冊』^㉞の戦国部分を利用した。ただし、この地図集に見られない地名でも、研究者による従来の地名比定に問題がないと思われるものは用いた。また、地名比定に異説があるものでも、妥当と思われる説は用いた場合もある^㉞。

製造地名を刻した銅器に関して、三晋地域のものについて整理したものとしては、黄盛璋「試論三晋兵器的国別和年代及其相關問題」^㉞があり利用できる。ここには、武器の製造地名として、韓では11、趙では8、魏では17挙げられており、さらに関連する貨幣、銅容器（銀器も含む）も附され、その製造地の位置も推定されている。2-(2)「戦国出土文字資料地名表」と「戦国都市分布図」の銅器に関しては、基本的にこれを依拠した。ただし、地名が上述の貨幣と重なるものは、貨幣の地名比定に合わせた。なお、黄氏の論文発表後に公表されたもので地名比定の可能なものは適宜追加した^㉞。

なお、三晋地域以外の銅器で製造地名を記したものはあまり多くなく、齊と秦に例があるくらいである。秦については、新しい材料にもとづいて整理している佐原康夫氏の論考^㉞を参照し、齊については拙稿「戦国出土文字資料概述」^㉞の齊の銅器の部分によった。

この他に、製造地名を記した器物としては漆器、陶器がある。これらは、主として前掲の拙稿を用いた。漆器に関しては、現在のところ、銘文から製造地名が知られるのは、

78 鄭、81 許、113 咸（咸陽）、成（成都）のみであるが、これらはかなり大きな都市であったと考えられる⁹⁰。陶器に関しては、その出土材料は秦に片寄っている。これは、秦で陶器に製造地名を入れる習慣が一般化していたためとみられ、陶器製造地の分布を示しているわけではない。陶器の製造が都市でも行なわれたことは、都市遺跡内にその遺跡が存在することからも証されるが、製造地は必ずしも都市だけではなかったと考えられる。陶器製造は、歴史的にみても、農村でも十分可能であった。ただし、製造地名を入れてその品質の保証を行なっている点、かなりの大量生産が推定でき、これらの陶器製造地はある程度の規模の都市であった可能性がある。このことは、秦の場合を見てもその地名はほとんど秦漢時代に県が置かれたところであることから推測できる。ただし、秦でこのような陶器の製造が始まるのは、考古学的にみて戦国末あるいは秦の天下統一以後のようである⁹¹。

以上、「戦国都市分布図」に用いた材料について検討を加えてきたが、ここでその分布傾向を見てみよう。一見してわかるのは、やはり河南省中央部に集中が見られ、しかも都市遺跡ともかなり重なり合っていることである。これによって、河南省中央部に都市の濃密な集中があったことはいっそう確実となったであろう。これに対して、河南省南部ではほとんど重なりは見られない。この地域は、戦国時代にはほとんど楚の支配下に入る地域であり、楚の支配のあり方となんらかの関係があるように思われる。分布のもう一つの特色は、山西省南部の広い地域に分布が広がっている点である。とくに、河水流域に分布が集中しており、しかもこれらはほとんど貨幣の発行地である。これらがどの程度の都市であったかは、都市遺跡とほとんど重なっていないため明らかでないが、貨幣発行を支えることのできるある程度の経済力を有した都市であったとみなされる。

要する、出土文字資料にもとづく都市分布は、都市遺跡の分布に比べて、その集中地域はかなり広がるものの、中心部では密集し、周辺部ではまばらであるという構図は変わらない。河南省、山西省南部のいわゆる三晋地域には都市の密集が見られるのに対して、その周辺部ではそれほどではないのである。ただし、すでに述べたとおり、出土文字資料による都市の分布の推定にも様々な問題が存在し、以上の検討でも十全とは言えない。さらにこの推定を確かなものとするため、以下において文献史料による検討を行なっておきたい。

(3) 文献史料による検討

すでに拙稿「戦国三晋都市の性格」⁽⁸⁸⁾でもふれたとおり、三晋地域のある部分では、かなりの数の大都市を含む多数の都市が存在したことは、文献史料によっても証することができる。すなわち、『史記』魏世家には、魏が安釐王の頃までに秦に奪われた県の数は、「山南、山北、河外、河内の大県数十、名都数百」であったとある。「山南、山北」とは山西省南部の中条山の南北、「河外、河内」とは河南省内の黄河の南北を指すと考えられ、この時、魏都大梁以西の魏の領土内には、大都市が数十、その他名のある都市は数百もあったことになる。なお、魏地に隣接する西周君の領土内については、宮崎氏が前掲の論文で⁽⁸⁹⁾、西周君が秦に対して「其の邑三十六、口三万」を尽く献じたという『史記』周本紀の記事から、その都市はせいぜい二、三百戸しかなかったとしている。しかし、これは西周君の領土というきわめて狭い範囲内のことにすぎず、一般化できないと思われる。

また、『史記』穰侯列伝にも、「穰侯、封ぜられて四歳、秦将となり魏を攻む。魏は河東の方三百里を献ず。魏の河内を抜き、城大小六十余を取る」とある。〈考証〉が言うように、この時、秦が取った城が「河内」の城であるとする、河南省の黄河以北の魏地には大小の都市が60余もあったことになる。

以上は、魏都大梁以西の都市の規模と分布を直接示す記事であるが、大梁以東については馬王堆出土帛書『戦国縦横家書』の第26章⁽⁴⁰⁾に注目すべき記事がある。この章は、魏が大梁南方の鄢陵を秦に攻められた時、ある遊説家が魏の將軍田儀に対して行なった献策からなっている。遊説家はここで、「梁の東地、なお方五百余里あり。而うして梁とともに千丈の城、万家の邑たる大県十七、小県の市有る者三十有余あり」と述べ、魏王に都大梁を退去して東方の単父に移って反撃することを勧めている。これによると、大梁より東方の魏の領地内にまだ、一辺が千丈(2250m)の城壁をめぐらし、一万戸の人口を擁する大都市⁽⁴⁰⁾が17、それ以外に市を有する経済力のある都市が30以上もあったことになる。ところが、先にふれた「戦国都市分布図」では、76 梁(大梁)より東の地は全く空白となっている。これは、『戦国縦横家書』の誤りではなく、遺跡が未発見だけであると考えられる。歴史上、黄河はしばしば河道を変え、現在の開封市のある大梁のあたりで東南方へ流出していたことが幾度かあった⁽⁴²⁾。北宋の首都開封は現在の開

封市の下にあり、戦国時代の大梁はさらにその下にあって、その深さは10mを越えると考えられる⁴³。大梁は、黄河の氾濫による土砂の下に完全に埋まっており、その形態さえわからない。この地域の他の戦国時代の都市も、膨大な土砂の下に埋まり、現在地表には全く痕跡が残っていないのも当然であろう。『戦国縦横家書』の記事を加味すれば、都市分布の濃密な地域は、河南省の中央部のより東方にも広がっていたと考えられる。

次に、三晋地域以外における都市の規模と分布はどのようなものであったであろうか。三晋地域のように直接的な記事はないが、間接的な史料はいくつかある。齊については、宮崎氏が前掲の論文で用いている『史記』楽毅列伝の記事がある。前284年、燕の將軍楽毅が齊都臨淄を陥した後のこととして、「楽毅は留まりて齊に徇うること五歳、齊の七十余城を下し、皆郡県となして、以て燕に属さしむ。ただ独り莒と即墨とのみいまだ服さず」とある。楽毅は、燕軍を率いてまたたくまに70以上の齊の城を占領し、抵抗を続けたのは莒と即墨という二都市のみであった⁴⁴。だが、この後、齊の將軍田単は抵抗を続けていた即墨に拠って燕軍を破り、またたくまに奪われた70余城を回復してしまった。宮崎氏は、この記事にもとづいて、「齊の領土の七十余城というものは全くあれども無きが如く、ただ順応して去就を定めるのみで、それ自身何等の独立性を有しないように見えるが、事実においてそれは人口も少なく、富力も貧弱で、軍隊もおかれぬ単なる農業都市で、甚だ無力な存在であったであろう」と述べている。氏は、これを戦国都市の一般的性格とみなしているが、齊に限った場合のみ妥当であろう。

これと同じような齊の状況は、『戦国策』趙策三にみえる先の田単と趙の將軍趙奢との会話にもうかがうことができる。田単は齊を回復した後、趙の恵文王30年（前269）、齊を出て趙の宰相となった。そこで、彼は趙奢に兵法について議論をふっかけた。

単、之を聞く。帝王の兵は、用うる所の者三万に過ぎずして天下服せり、と。今、將軍は必ず十万、二十万の衆を負うて乃ち之を用う。此れ単の服せざる所なり。これに対して、趙奢は、田単の論が兵法に通達していないだけでなく、今の時勢もわかっていないとして反論する。

古は四海の内分かれて万国と為る。城は大といえども三百丈を過ぐる者なく、人衆きといえども三千家を過ぐる者なし。而うして集兵三万を以て此を距ぐ。なんぞ難からんや。

と述べ、さらに、

今、千丈の城、万家の邑相望むなり。而うして三万の衆を以て千丈の城を囲まんことを索むるも、その一角をも存せずして野戦にも用うるに足らず。君將に此を以て何にか之かんとす。

この議論は、古と今との比較としてなされているが、実際にはともにそれぞれの現状認識にもとづいているとみなしてよい。田単はもと斉の將軍として斉の現状を、趙奢は趙の將軍として趙を中心とする三晋地域の現状を踏まえていると考えられる。とくに、田単の認識には、先に少数の兵で燕の占領軍を撃破した実戦経験が大いに影響していたと考えられるであろう。斉では70以上の城壁を持った都市があったが、それは「あて無きが如き」小都市に過ぎなかったため、3万程度の軍隊でも勝利は可能であったのである。やはり斉では一部、臨淄や即墨など経済力を有する大都市も存在したが、大部分は未発達な都市に止まっていたと考えてよいであろう⁴⁹。それに対して、三晋地域では「千丈の城、万家の邑相望むなり」とあるが、これは前節で述べた状況と全く合致している。

以上のような他国の領土の迅速な占領という点に注目すれば、その他にもいくつかの事例を挙げることができる。その一つは、上述の燕が將軍楽毅をして斉を攻めさせる遠因となった事件である。前316年、斉は燕の内乱に乗じてその国都を占領したが、その占領はきわめて速やかであったようである⁴⁹。それは、燕の斉と国境を接する地域には、斉の軍に抵抗できるほどの都市がなかったためであると考えられる。また、春秋時代末に遡る例であるが、呉が楚都郢を占領した場合も同様であろう。『春秋』定公4年の条によると、呉は柏挙で楚を破った後、十日で楚都を陥している⁴⁹。呉がこのような迅速に行動できたのは、一つには楚都の東面には呉の背後を突くことができるほど有力な都市があまりなかったことを示していると思われる。

この他、他国の占領ということと都市の関係で興味深いのは、秦の天下統一の過程である。秦は東方進出に際して都市の抵抗をしばしば受けているが、占領地の支配が安定すると郡を置いている⁴⁹。この置郡の過程を見れば、その支配の困難さの程度がわかり、ひいては占領地における都市の発達の程度も推測できると考えられる。有力な都市が多くあればあるほど、常識的に考えて占領地の支配は容易でなかったと考えられるからで

ある。現実には、趙氏の本拠であり、相当の大都市であった晋陽は、智伯とその同盟の韓氏、魏氏の大軍に包囲されながらも一年余りたっても陥ちなかった⁴⁹⁾。また、上述の斉の莒や即墨なども（Ⅲ、2-(2)「戦国出土文字資料地名表」のごとく、ともに貨幣を発行することができる経済力を有する都市であった）、燕軍に攻囲されながらも数年間も持ちこたえているのである⁵⁰⁾。

さて、秦の置郡年次については、楊寛氏の新版『戦国史』⁵¹⁾の附録一、戦国郡表六に秦国設置の郡の一覧表があり利用できる。また、馬非百『秦集史（下）』⁵²⁾の郡県志でも、主として譚其驤氏の説を参照しながら秦の置郡年次が考証されている。この両氏の説には多少の異同があるが、基本的な点では大差ないので、ここでは楊氏の説によって秦の置郡過程を見ていきたい。

秦の置郡過程は、前 316 年に巴郡を設置して以後⁵³⁾、前 221 年に天下を統一するまで大体四期に分けることができる。まず、第一期は前 271 年までで、秦の本拠地である内史の周辺から南方、東南方に置郡される時期である。とくに、東方に対しては、前 290 年に河東郡が設置されて以後⁵⁴⁾、その東に置郡されることはなく、かえって東南方に南郡（前 278）、南陽郡（前 273）が設置されている。これは、ちょうど三晋地域を避けて東南方に迂回した形になっている。そして、その後、前 271 年に北地郡が設置された後、前 250 年まで長期にわたって安定した郡は設置されていない⁵⁵⁾。これが第二期である。秦は、この時期にも頻繁に東方の三晋地域に進出し都市を占領しているが⁵⁶⁾、安定した支配を維持することができなかつたと考えられる。第三期は前 249 年から前 226 年までで、三晋地域の置郡が進む時期である。この間には、三川郡（前 249）、上党郡（前 247）、東郡（前 242）、潁川郡（前 230）、邯鄲郡（前 228）など三晋地域の中心部の郡と、その北方の郡をあわせて 8 つ設置されている。ただし、これだけの郡が設置されるまで 24 年間かかっている。最後の第四期は前 225 年から天下を統一する前 221 年までのわずか 5 年間である。この間には、斉、燕、楚を滅ぼし、16 もの郡が設置されている。

まず、第一期の東方を迂回しての東南方への進出は、三晋都市の抵抗によって東方への進出をはばまれ、大都市が少なく抵抗のより少ない地域に進出せざるをえなかつたことを示している。次の第二期の置郡の空白期は第一期の延長と推測される。秦は三晋地

域の奥深く進入するものの、多数の大都市の抵抗をうけて、ある程度まとまった領域を安定的に支配する郡を設置することができなかったと考えられる。そして、第三期になってようやく三晋地域に置郡されるようになるが、それが完成するまで四半世紀近くかかっており、やはり三晋地域の都市の抵抗の強さをうかがうことができる。ところが、秦はこの三晋地域を突破してその置郡を完成させると、その東方の齊、燕、楚の領域の置郡のスピードは急速に高まり、一挙に天下統一へとつき進む。これは、もちろん支配地域の拡大に伴って、国力、軍事力が急激に高まったことによると考えられるが、齊、燕、楚の領域に長期にわたって抵抗できるほどの大都市があまりなかったことにもよると思われる。このように、やはり秦の置郡の過程を見ても、置郡がなかなか進まなかった三晋地域には大都市が多数発達していたと推定されるに対して、置郡が容易であったその周辺の齊、燕、楚の領域には都市の発達がそれほどではなかったと考えられるのである。

最後に、秦自体については、商鞅の第二次変法で行なわれた大県大県の設置の仕方が参考になろう。『史記』秦本紀には、

諸の小郷聚を并せ、集めて大県と為す。県に一令、四十一県あり。

とある。これは、商君列伝では「小都郷邑聚を集めて県と為し、令丞を置く。凡そ三十一県なり」とあり、六国年表では「初めて小邑を取りて三十一県を為る」となっている。いずれにせよ、小集落をいくつかあわせて行政単位としての県を設置したものと考えられる⁶⁷⁾。そうすると、置県の行なわれた地域では単独で県を設置できるほど大きな都市が存在しなかったことになる。この時の置県がどの地域で行なわれたか明らかでないが、秦ではかなり広い範囲にわたって目立つほどの都市がなかったのではなかろうか。

(4) 都市の発達と交通路

以上によって、戦国時代を中心とする時代には、都市発達の程度の異なる二つの地域が存在することが明確になった。すなわち、三晋地域では、巨大都市がかなり密集して発達したのに対して、その周辺地域では、国都は巨大であるものの、一般的な地方都市の発達はそれほどでもなかったのである。

では、なぜ三晋地域に限って巨大な都市が多数発達したのであろうか。結論から言え

ば、それは商業交通路の発達と大いに関係があったと考えられる。『史記』貨殖列伝には「陶は天下の中、諸侯四通し、貨物の交易する所なり」とあり、ここを拠点に大商人が活躍したとされている。戦国時代において、山東省の河南省寄りの地域は交通路の集まる世界の中心地で、陶という商業都市が発達していたことは間違いないであろう。宇都宮氏は、この陶やその東北方の衛は、東西、南北の大幹線水路が交わる場所に発達した世界的大都市であったとしている⁽⁵⁸⁾。史念海氏も、戦国時代に陸路、水路の交通の要衝に多くの経済都市が発達したことを認めているものの、水路交通によって発達した「天下の中」としての陶をとりわけ重視している⁽⁵⁹⁾。さらに、伊藤道治氏も、斉と晋の会盟地の検討をもとに、これらの都市を含む曹、宋、衛の接壤する地域は、すでに春秋時代において東西、南北の交通路が交叉する商業交通の中心地であったとみなしている⁽⁶⁰⁾。

これによって、確かに河南省東部から山東省西部にかけての地域に交通路の中心地が存在し、商業都市が発達していたことが確認できるが、この地域はこれまで論証してきた都市発達の顕著な地域の一部にすぎず、あまりにも東辺に片寄りすぎていると言わねばならない。それでは、それ以外の三晋地域の都市発達は、商業交通路の発達という経済的な要因とは関係なかったのであろうか。この点に関して、直接証明する材料は現在のところ見出しえないが、前後の時代から推測できるのではないかと考える。

前の西周時代の交通路については、伊藤道治氏が『春秋左氏伝』にもとづく姫姓諸侯の配置および西周時代の考古学的遺跡の分布の検討から論じている⁽⁶¹⁾。氏は、周の姫姓諸侯の封建は重要な交通路を確保することが一つの目的であったとみなし、これらの諸侯は交通路に沿って配置されたことを明らかにしているのである。すなわち、周は本拠地の渭水流域を起点として東方に進出するが、まず山西省南部に姫姓諸侯を配置する。そして、そこから汾水を溯る方向と黄河を下る方向に向かう。黄河を下った河南省中央部には多数の姫姓諸侯が封建され、この地域は東方支配の根拠地となる。周は、この地域を起点としてさらに北方、東方、東南方に姫姓諸侯を配置しながら進出したとしている。そうすると、西周時代においては、重要な交通路が分岐する中心地域として山西省南部、河南省中央部が注目される。この地域はまさに戦国時代に都市が発達する地域そのものと言ってよい。

一方、後の前漢時代については、『史記』貨殖列伝に注目すべき記事がある。司馬遷は、「昔、唐人は河東に都し、殷人は河内に都し、周人は河南に都す。夫れ、三河は天下の中にありて鼎足の若し。王者の更も居る所なり」と述べ、三河の地域を中心に、同時代における全国各地に通じる主要な交通路とそれに対応する地域の社会的、経済的特色について記している⁶²。司馬遷の時代においては、三河、すなわち山西省南部の河東、河南省の黄河以北の河内、黄河以南の河南省中央部の河南は、四方の交通路が集中する商業経済の中心地として認識されていたのである⁶³。この地域も、戦国時代に都市が発達した地域とほとんど重なっている。

要するに、春秋、戦国時代の前後の時代、すなわち西周時代と前漢時代において、重要な交通路の中心地は、戦国時代に都市が発達した地域とほとんど重なっているのである。交通手段に大きな変化がなかったと思われる古代において、重要交通路の中心地が容易に移動したとは考えられず⁶⁴、戦国時代に交通路の中心地が東辺に片寄っているように見えるのも、現存史料の片寄りによるためと考えられる。また、春秋時代における伊藤道治氏の推測も、斉と晋を中心とした会盟地に限定してなされたものであり、他に交通路の中心地があったことを必ずしも否定するものではない。したがって、戦国時代の三晋地域を中心とする都市の発達には、やはり経済的な要因が大きく係わっていたと考えて大過ないのではなかろうか。ただし、なぜ戦国時代を中心としてこの地域に都市が発達したかについては、別にその要因を考える必要があろう⁶⁵。

ともかく以上によって、宇都宮氏と宮崎氏の都市論は、それぞれ一面で正しく、一面で不正確であると言うことができる。三晋地域に限って見れば宇都宮氏の考えが妥当であるが、その周辺地域については宮崎氏の考えも一概には否定できないように思われる。では、それぞれの地域ではいかなる都市支配が行なわれたのであろうか。それぞれの地域の都市の性格をよりいっそう明確にするためにも、この点を明らかにしておく必要がある。

3 戦国諸国家の都市支配

(1) 三晋地域の諸国家

まず、経済的な要因によって都市が発達したと考えられる三晋地域の諸国家、すなわ

ち韓、魏、趙における都市支配のあり方について見ていきたい。これらの国々の都市支配の一般的あり方を推測するには、先に分布と規模の検討に用いた出土文字資料が参考になる。すでに述べたとおり、三晋地域の各都市はそれぞれ銅器や貨幣、陶器などを製造していたが、それは一方では各国の都市支配のあり方をも示しているのである。

この点は銅兵器と貨幣において顕著に認めらる(66)。三晋地域で製造された銅兵器には、その製造の責任を明らかにするため、製造監督者名を刻したものがかなりの数知られている。たとえば、近年、河北省臨城県で出土した銅戈(67)には、「二年、邢令孟東慶、□庫工師楽参、冶明執剂」の刻銘がある。「邢令孟東慶」とはこの戈の製造監督者、「□庫工師楽参」は製造現場の責任者、「冶明」は実際に製造した工人とみなされる(68)。したがって、この戈は、趙に属したと考えられる邢県において(69)、その長官である令の責任によって製造されたものと考えてよい。三晋地域で製造された銅兵器には、この他、中央政府の官が製造監督者となっているものも存在するが、県令が製造に係わっているものについては、県令より上位の官名が刻されている例は見当たらない(70)。すなわち、県の製造に係る銅兵器の最高統轄者は県令に止どまり、それより上位の官は関与していないのである。これは国都の場合でも同じで、国都を県として統轄する令が中央政府とは独立して銅兵器を製造している。したがって、三晋地域の国々では例外なく、県、すなわち都市は独自の銅兵器製造機構を有し、県＝都市の最高統轄者である令によって統轄されていたとすることができる。そして、このことはとりもなおさず、三晋地域の県＝都市が中央政府から軍事的に独立した存在として認められていたことを示している(71)。

貨幣についても、その鑄造、発行が都市を単位としていたことは明白である。上述のように、三晋地域で主として発行されたと考えられる尖足布には31種類、方足布には66種類の地名が認められ、その他鄭家相氏の書(72)によると、橋形方足布17種類、円足布7種類、三孔布11種類、円孔円銭10種類、直刀銭5種類の地名が見える。これらの地名には重なるものもあるが、三晋地域では非常に多くの都市が貨幣を鑄造、発行していたことがわかる。そして、貨幣の銘文からは、その発行がより上位の郡や中央政府に統轄されていたことをうかがわせるような形跡は認められないし、また排他的に流通した国家による統一貨幣も存在しなかったようである(73)。したがって、国家の統制を受けず独自の貨幣を発行することのできた三晋地域の都市は、中央政府に対して軍事的に独立して

ただだけでなく、経済的にも独立した存在であった可能性が強い。

しかし、一方では、三晋地域の都市は、上位権力の統制を全く受けない、制度的に完全に独立した存在であったと言い切ることもできない。これらの都市は、現実に県に編成され、その長官である令は王によって任命される直轄地であり⁷⁴、またその県を統轄する郡も置かれていたのである。とは言うものの、中央政府がこの制度によって都市の独立性を奪って完全に従属させることを意図したと言い切ることもできない。このうち郡については、三晋地域では主として辺境の防衛のために置かれ、軍事的にまとまって敵国の攻撃に対処することが主眼とされていて、中央政府の統制という側面はそれほど強くなかったと考えられる⁷⁵。それでは一方、県＝都市一般に対する中央政府の現実の支配のあり方はどのようなものであったのであろうか。この点については、中央政府の施策面から検討してみたい。

魏は文侯の時、李悝を相として国政の改革を行なったと伝えられている。李悝は「尽地力之教」によって農業生産の増加をはかり、『法経』を制定して秩序維持をめざしたが、この他に「平糶法」という施策を行なったと言われる。『漢書』食貨志上に李悝の言として、

糶甚だ貴きは民を傷ない、甚だ賤きは農を傷なう。民傷なわれば離散し、農傷なわれば国貧し。故に甚だ貴きと甚だ賤きは其の傷なうこと一なり。善く国を為むる者は民をして傷なわしむることなくして益々勤ましむ。

とある。そして、ついで国家が年の豊凶にもとづいて、穀物を買入れたり売り出したりして穀価を安定させる方策を具体的に述べている。李悝のこの「平糶法」は、基本的には農民保護の上に立ってなされたものであり⁷⁶、商人の投機的活動を抑制する方向にあるが⁷⁷、農民以外の「民」をも配慮していることに注目される。この「民」について、韋昭は「士・工・商なり」と注しており、基本的には都市住民を指すと考えられる。国力の基礎として農業を重視する李悝にあっても、都市住民の存在は無視できなかったのである。あるいは、むしろ国力のもう一つの基礎として保護されるべきものと認識されていたとみなしてもよいかもしれない。

魏においては、この後、恵王の相となったとされる白圭⁷⁸などは、明らかに重商主義的立場に立っている。『史記』貨殖列伝によると、

白圭は事変を観るを楽しむ。故に人棄つれば我取り、人取れば我与う。夫れ歳熟すれば穀を取り、之に絲漆を予え、繭出づれば帛絮を取り、之に食を予う。

とあり、さらに「時に趨くこと猛獸摯鳥の発するが若し」とあって、時期を見て敏速に売買することの重要性を述べている。これはまさに投機的商業の手法であり、白圭は実際に商人出身であった可能性もある⁷⁹⁾。このような立場の人物の施策が都市の商人に対して抑圧的であったとは考えがたい。あわせて、この恵王の時には、孟子が王に自給自足的な農業政策を説いて退けられていることも考慮すべきであろう⁸⁰⁾。これらの点から魏は自由な商業活動を容認する方向にあり、決して県＝都市の独立性を否定することはなかったと考えられる。

魏以外の韓、趙については、その県＝都市支配に直接係わると思われる施策に関する史料は見出すことはできず明確なことは言えない。ただし、韓においては、昭侯の相となった申不害が中央集権的な君主専制体制をおし進めたとされており⁸¹⁾、都市に対する統制も強められたことが一応考えられる。しかし、申不害は君主の意図を臣下にさせない「術」を重んじたと言われ、また司馬遷は「申子の学は黄老に本づきて刑名を主とす」とも述べている⁸²⁾。司馬遷の生きた漢代において、「黄老」の政治とは上の者が政治の大体を把握するのみで、下の者に干渉しないことをモットーとしたとされる⁸³⁾。この「黄老」政治と「術」的態度は通じるところがあり、申不害の政治が都市に積極的に干渉するものであったかどうかは疑問である。また、拙稿「戦国三晋都市の性格」において述べたように⁸⁴⁾、韓の上党郡の吏民が秦の都市を強く統制しようとする支配を拒絶して趙に降った事件などから見ても、両国とも県＝都市を強力に統制しようとする体制はとっていなかったと考えられる。

要するに、三晋地域の諸国家は、確かに都市を県に編成して官僚制的に支配していたが、その独立性を認めた上での支配であったと考えられる。これは、都市の経済的实力によって規定された支配のあり方と考えられるが、これらの都市が中央派遣の官僚以外に独自の権力を生み出し、自治都市化しえなかったことも事実である。経済的に発達した都市が、なぜ官僚制化して行くのか大きな問題であるが、これは官僚の性格との係わりの中で改めて考察すべき問題であると考えられる⁸⁵⁾。

(2) 周辺地域の諸国家

三晋地域の周辺の諸国家、すなわち齊、燕、楚、秦などの諸国の都市支配あり方についても出土文字資料が参考となる。注目されるのは、これらの諸国の中央政府の都市に対するあり方に共通した点が認められることである⁸⁶⁾。すなわち、銅兵器、貨幣を見ても、三晋地域の諸国ほど顕著に都市が独立してその製造、発行に関与していたとは考えられないのである。むしろ、これらの諸国の都市は中央政府に対してかなり隷属的であったように思われる。

齊でも、地方都市が独自に銅兵器を製造していたことは確認できるが、その事例は三晋地域の国ほど多くない。貨幣に至っては、都市独自の発行と考えられるものは、「節罍」「安陽」「譚」「齊」の地名を冠する刀銭4種類が知られるのみであり、しかも「齊」字を冠するもののうち、最後に出現するとされる「齊法化」銘の刀銭は国家発行の統一貨幣と考えられている。このことから、齊では貨幣を発行できるほどの経済力のある都市はもともと少なく、その貨幣発行権も最終的には国家に奪われてしまったようである。燕では、現在のところ、王や官府に統轄されて製造された銅兵器は知られているが、明らかに地方都市製造と考えられる例は発見されていない。貨幣については、「益昌」「襄平」「旬陽」「平陰」など地方都市が発行したと考えられる方足布が少数知られるが、国家による統一貨幣とみられる「明」字様刀銭が大量に流通している。楚においては、銅兵器には有銘のものが乏しくなんとも言えない。ただし、貨幣については、「陳爰」「專爰」「郢爰」「𠄎」「盧金」金版など地方都市発行と考えられるものもいくつが存在する。しかし、これらの発見例はきわめて少なく、国都で発行された「郢爰」金版や蟻鼻銭が大量に流通しており、これらが実質的な国家の統一貨幣であった可能性がある。楚でも、都市の経済的独立性は否定される傾向にあったとみなすことができる。

三晋地域の諸国ととりわけ対照的なあり方を示しているのは秦の場合である。拙稿「戦国三晋都市の性格」で詳述したように⁸⁷⁾、銘文から見て銅兵器の製造は実際に県＝都市で行なわれていても、その最高統轄者は県令ではなく、より上位の相邦（あるいは丞相）や郡守であった⁸⁸⁾。また、地方発行の貨幣も見出されず、統一貨幣としての半兩銭が広く流通している。秦においては、都市の軍事的、経済的な独立性を否定して、上位の権力に従属させようとする傾向がとりわけ強かったとすることができる。

以上のごとく、銅兵器や貨幣の銘文を見る限り、周辺地域の諸国家は、三晋地域の諸国家に比べて、地方都市を統制し、従属させようとする傾向が強いように見うけられる。そこで、この点をより明確にするために、ここでも各国の施策面から検討しておきたい。

まず、齊について見ると、『史記』田敬仲完世家に次のような威王の地方官統御に係わる話が記されている。威王は、即位すると政治を卿大夫にまかせきりにしたため、九年の間まわりの諸侯に攻められ、国内も大いに乱れた。ところがある時、威王は覚醒し、即墨大夫を召して次のように告げた。

子の即墨に居りてより毀言日々至る。然れども吾れ人をして即墨を視しむれば、田野闢らけ、民人給し、官に留事なく、東方以って寧んず。是れ子の吾が左右に事えて以って誉を求めざればなり。

威王は、この即墨大夫を一万家に封じた。ついで阿大夫を召して告げた。

子の阿を守りてより、誉言日々聞す。然れども使をして阿を視しむれば、田野闢らけず、民は貧苦す。昔日、趙の甄を攻むるも子は救わず、衛の薛陵を取るも子は知らず。是れ子の幣を以って吾が左右に厚くし、以って誉を求むればなり。

威王は即日、この阿大夫と彼を誉めた側近をともに烹殺してしまった。そして、ついに軍を動かして周囲の国々に攻め込み、打ち敗った。そこで、齊の人々は懼れおののき、齊国は大いに治まったとされている。ところで、滑稽列伝では、この部分は「諸県の令長七十二人を朝し、一人を賞し、一人を罰す」となっている。この時、齊国の全県の長官が召集され、彼らの面前で王自らによって即墨と阿の長官の賞罰が行なわれたと考えられる。ここからは、齊王が全地方官の治績を直接掌握し、さらにその賞罰を明確にすることによって、きびしい統御を行なおうとしていることが読み取れる。齊ではやはり地方の県をその長官を通じて中央集権的に掌握することが意図されており、当然、県の置かれた都市も王を中心とする中央政府の強い統制下に置かれていたと考えられる。ただし、この中央集権化がどこまで徹底したか疑問とする考えも存在する⁸⁹⁾。

燕については検討に値する材料を見出すことができないが、楚については、悼王の令尹となった呉起による改革が問題となる。呉起の改革については不明な点が多いが、改革の重要な目的の一つは世族勢力を抑えて王権を強化することにあたったとされている⁹⁰⁾。楚でも、中央集権的な支配の確立がはかられ、それとともに県＝都市の統制も強め

られたことが予想される。しかし、この改革は世俗勢力の反撃によって呉起が殺されたことにより、それほど徹底しなかったと考えられる。

最後に秦について見てみよう。秦についてはやはり、孝公の時の商鞅の改革が問題となろう。この改革は多岐にわたっているが、県＝都市の支配に直接関係するのは、先にふれた、小集落（小都市も含むと考えられる）をいくつかあわせて県という行政単位を設置した点である。この県による支配は、上から行政的、人為的に各集落を統制しようとするものであり、個々の集落の独自性は全く考慮されていない。また、この改革の基調は農業に置かれており、都市住民に対する施策が全くないだけでなく、逆に都市の重要な構成員と考えられる商工業者に対する抑圧が行なわれている。『史記』商君列伝には、

大小力を僇わせ、耕織を本業とし、粟帛を致すこと多き者は其の身を復す。末利を事とし、及び怠けて貧なる者は挙げて以って収斂と為す。

とあり、明らかに「重農抑商」の立場に立っている。商鞅の改革は、都市支配に関して見る限り、都市の独立性を否定し、強く統制しようとする方向にあったと言ってもよいであろう。

ただし、莊襄王の時から秦王政の初年にかけての時期は、陽翟の大商人であった呂不韋が丞相、相国となり、秦でも商工業を重視する傾向が生じたとされている⁹¹⁾。このことは、秦の本拠地である内史を中心とした地域の問題として考えるべきではないであろう。秦は、この時上述のように三晋地域の奥深く進出し、多くの都市をその支配下に置いている。そして、この呂不韋が丞相となると同時に置郡が進行している。このことから、秦の商工業に対する方針の転換は、三晋地域における都市支配の進展と関係があると考えられるが、この時いかなる都市支配が行なわれたかは明らかでない。

以上、要するに、周辺地域の諸国における、その本来の支配地域の都市支配のあり方は、それがどれだけ徹底されたかは別として、一般に中央政府が強力に統制しようとする傾向が強かったとみなして差し支えないであろう。

4 むすび

以上によって、戦国時代には都市発達の程度の異なる二つの地域が存在したことはも

はや疑いはないであろう。この時代、黄河中流域を中心とする三晋地域には巨大な都市が多数発達していた。この地域は古くから重要交通路が集中していた地域であり、宇都宮氏がすでに指摘しているように、その発達は経済的な要因によるところがきわめて大きかったと考えられる。都市は、そのような経済的な実力を背景に、その軍事的、経済的な独立性を獲得していったのである。そして、国家による支配もその強力な抵抗を受け、その独立性を容認せざるをえなかったと言えよう。これに対して、三晋地域の周辺地域では、国都は別として、都市は概して小さく、またそれほど密集して発達してはいなかった。こちらの方は、宮崎氏の指摘どおり、都市の多くはいまだ未発達な農業都市の段階に止まっていたとみなしてよいかもしれない。この地域では、国家による支配も強力な抵抗を受けることは少なく、中央集権的な支配を行なうことが可能であったと考えられる。言い換えれば、中央集権的な専制支配は都市の未発達な地域で発達したと言うことができる。そして、このような支配を最も徹底して行なったのが秦であった。

秦は、天下を統一した後、中央集権的な都市支配を全国的によりいっそう推し進め、都市の独立性を根本から否定するに至る。すなわち、秦は天下統一と同時に、支配地域全域に郡県制を施行するとともに、都市の独立性の象徴とも言える城壁を破壊し、その銅兵器製造権をも奪っている⁹²。そして、また天下の豪富者を咸陽に強制的に移住させ、首都の経済力の増強をはかる一方、地方都市の経済力の削減をはかっている⁹³。さらに始皇帝の33年には、逋亡人や贅壻とともに賈人を南方の地に強制的に送り込んで新しい郡の設置を行なっている⁹⁴。これも、都市の経済力を弱体化することが一つの重要な目的であったのではないと思われる。

しかし、秦のこのような強引な中央集権的都市支配も始皇帝の死とともに破局を迎える。早くも二世皇帝が即位した年に陳勝が挙兵すると、それに呼応して郡県の少年たちが都市を支配する太守、県令を殺して自立し始めるのである⁹⁵。そして、この混乱を最終的に収拾して成立するのが漢王朝である。この漢王朝は、もはや秦と同じ道を歩まず、都市の独立性を容認する立場を取っている。漢王朝は、三晋地域の発達した都市を安定的に支配するためには、どうしてもこのような立場を取らざるをえなかったのではないかと考えられる。

まず、漢の高祖劉邦は即位の六年に、秦によって破壊された都市の城壁の修復を命じ

ている⁹⁶。これは、漢王朝が都市の存在意義を認めたことを示しているであろう。ただし、高祖は、商人に対しては「商賈之律」を發布し、なおかなり差別的な対応をしている⁹⁷。しかし、この律も恵帝、呂後の時代になると弛められ⁹⁸、さらに政治思想として黄老思想が流行し⁹⁹、統制よりも自由放任の政治が理想とされるようになる。そして、次の文帝の時代には、民間で自由に貨幣を鑄造することさえ許されている⁽¹⁰⁰⁾。『史記』平準書には、武帝が即位した当初のこととして、

都鄙の麋庾皆満ちて而して府庫貨財を余す。京師の錢巨万を累ね、貫朽ちて校う可からず

とあり、経済の活況のさまをうかがうことができる。都市も、このような状況のもとで発展し続けていたと考えられる。

しかし、この武帝の時、対外的な膨脹政策による財政の破綻によって、以上のような自由放任的な政治も方向転換をせざるをえなくなる。『史記』平準書によると、この時、財政再建のための算緡令や告緡、さらに塩鉄の専売化などが行なわれ、都市の商人は没落を余儀なくさせられていく。漢代における、都市の縮小、衰退は、直接的にはこうした抑商政策によると考えられるが、中央集権的な帝国の存在自体の中にもその要因は内包されていたと考えられる。ジェーン・ジェイコブズ女史によると、歴史的に見て、中央集権的な帝国の政策と取引は、繁栄する都市から富を一方向的に吸い上げることによって、都市の衰退をもたらし、ひいては帝国自体の没落をもたらすとしている⁽¹⁰²⁾。したがって、漢代における都市の縮小、衰退も、この時代の都市の経済的基盤の脆弱性によるとは、必ずしも言えないではなかろうか。

注

- (1) 『漢代社会経済史研究』（1955、弘文堂書房）。
- (2) 服部克彦『古代中国の都市と周辺』（1962、ミネルヴァ書房）など。
- (3) 1955、上海人民出版社、頁97。新版は1980年に同じ出版社から出ているが、都市に関する考えは変わっていないようである。
- (4) 「中国古代都城規劃的發展階段性－為中国考古学会第五次年会而作」（文物1985－2）。
- (5) 「論戦国城市的發展」（遼寧大学学报1982－6）。また、同氏は『春秋戦国城市經濟發展史論』（1988、遼寧大学出版）でも、都市發達の經濟的要因を重視しているが、一方では国家による管理がその經濟的發展を抑えたことも強調している。
- (6) 黄以柱「河南城鎮歷史地理初探」（史学月刊1981－1）、張南、周伊「春秋戦国城市發展論」

- (安徽史学1988-3) など。
- (7) 『東方学会創立十五周年記念東方学論集』(1962)。なお、この論文は『アジア史論考中』(1976、朝日新聞社)に再録。
 - (8) 「先秦時代の都市」(研究30、1963)。
 - (9) 「中国古代における都市と商工業」(『中国古代の商工業と専売制』、1984、東京大学出版会)。
 - (10) 「中国古代聚落の展開」(歴史学研究別冊特集『地域と民衆』、1981)。
 - (11) 「城市の形成と中央集権体制」(歴史学研究別冊特集『民衆の生活・文化と変革主体』、1982)。
 - (12) 「戦国時代の府・庫について」(東洋史研究43-1、1984)。
 - (13) 名古屋大学文学部研究論集XCV(史学32)、1986。
 - (14) 用いた報告書の内、主要な雑誌は巻末の「都市遺跡調査書目一覧」に示した。なお10と25の城址群は一つの遺跡としてあつかった。
 - (15) Ⅲ、1「西周・春秋都市遺跡表」の1白店古城、7陳城遺址、17季家湖古城。
 - (16) Ⅲ、3「秦・漢都市遺跡表」の5漢魏故城、16温県古城、26宛城址、32曲阜漢城、55右北平郡址、77漢長安城、86丹鳳県古城、130雒城。
 - (17) 注(8)論文。
 - (18) たとえば、52鄭州商城の周辺では、一辺1km以上の都市遺跡が46~49、51、56、57など大体20kmくらいの間隔で七ヶ所も発見されている。
 - (19) 河南省については、楊育彬『河南考古』(1985、中州古籍出版社)の附録の遺跡表によって河南省内の遺跡の全貌をほぼ知ることができるが、他の省については、現在のところ、このような網羅的な遺跡の紹介はなされていない。
 - (20) たとえば、秦の〈元年丞相斯造戈〉(考与文83-3、頁22)のように、最初の製造責任を示す銘と後刻の地名銘がある場合、後刻の部分は使用地を指すと考えられる。
 - (21) 以下でふれるⅢ、2-(2)「戦国出土文字資料地名表」によると、四分の一に近い都市遺跡において、製作場遺跡や貨幣、銅器の地名が重なっている。
 - (22) 戦国時代に発行された貨幣として、空首布、橋形方足布、尖足布、方足布、円足布、三孔布、刀銭、円銭などがあり、それぞれにさらにバリエーションがある。ただし、空首布のうち大型のものは春秋時代に溯ると考えられ、その銘文も地名ではないようである(拙稿「戦国出土文字資料概述」〔林巳奈夫編『戦国時代出土文物の研究』1985、京都大学人文科学研究所〕参照)。
 - (23) 1958、生活・読書・新知三聯書店。
 - (24) Ⅲ、2-(3)「戦国出土文字資料地名表・補」の23、24。
 - (25) Ⅲ、2-(3)「戦国出土文字資料地名表・補」の10。
 - (26) Ⅲ、2-(3)「戦国出土文字資料地名表・補」参照。
 - (27) Ⅲ、2-(3)「戦国出土文字資料地名表・補」の4。
 - (28) 後述の譚其驤氏の地図(注(30))にも、平陽、安陽、高都、蒲阪、新城、陽城など二カ所に同一地名が記されている場合がかなりある。
 - (29) 注(23)鄭家相書の戈、采、壤陰、郭氏、木邑、毋丘、匄陽、邪、城、商成、平州、寿陰、

垂など（Ⅲ、2-(3)「戦国出土文字資料地名表・補」の5、15、17、18、29、30、32、34、35、36、37、39、56）。

- ③⑩ 1982、地図出版社。
- ③⑪ ただし、注（23）鄭家相書などは、ほとんどすべての貨幣に地名比定を行なっているが、かなり強引な比定もあり、そのようなものは用いなかった。
- ③⑫ 考学74-1、頁40。
- ③⑬ 武器では、Ⅲ、2-(3)「戦国出土文字資料地名表・補」の7闕与、23潞、44邢、77啓封、82桐丘、102燕があり、その他の銅器としては32安邑がある。
- ③⑭ 注（12）論文。なお、武器以外の銅器として、14漆垣、109雍を付け加える必要がある。
- ③⑮ 注（22）。
- ③⑯ 咸陽、鄭は一国の首都であり、許、成都も後代大都市に成長している。
- ③⑰ 地方の県の陶工の存在を示す印文を有する陶片は、ほとんど始皇陵周辺の遺跡から出土していることから始皇陵造宮に係わるものであり、このような陶器の製造の開始もそれほど古く遡らせることはできない（注（22）拙稿、頁430）。
- ③⑱ 注（13）。以下『史記』魏世家、穰侯列伝の解釈については、この拙稿参照のこと。
- ③⑲ 注（7）。
- ④⑰ 馬王堆漢墓帛書整理小組編、1976、文物出版社。
- ④⑱ 『史記』では、県、都、城の語がそれぞれ互いに言い換えられることがあるが、みな城壁を有する都市を指していると考えてよいように思われる。なお、大県については、銀雀山出土竹簡の庫法篇（文85-4、頁31）では「大県二万家」となっている。
- ④⑲ 鄒逸麟「黄河下游河道变迁及其影響概述」（譚其驤主編『黄河史論叢』〔1986、復旦大学出版社〕）。
- ④⑳ 現代の開封市の地下3、4mのところでは明代の家屋の屋根が発見されており、宋代の開封城の地面は地下10mぐらいのところにあるはずだと推定されているが（注（42）鄒論文、頁235）、杉本憲司氏によると、近年実際に地下10mのところから宋代の橋が発見されたという。そうすると、戦国時代の大梁城はさらにその下に埋まっていることになる。
- ④㉑ 『史記』燕召公世家では聊、莒、即墨の3城となっているが、〈考証〉は聊は衍字としている。
- ④㉒ 『史記』燕召公世家に、齊が燕の内乱に乗じてその国都を攻めた時、「五都之兵」を動員したとある。このことによって、齊には大量動員が可能な5つの特別な都市があったことがわかるが、一方ではこれら都市と他の都市の間には大きな格差があったことも思わせる。なお、楊寛氏は、臨淄、平陸、高唐、即墨、莒を「五都」とし、これらは他国の郡にあたるとするが（注（3）新版『戦国史』、頁213）、確証はない。
- ④㉓ 『史記』燕召公世家、『戦国策』燕策一。
- ④㉔ この時、呉に占領された楚都は、湖北省江陵県北郊の紀南城とするのが一般的であるが、江陵県西北34kmの陰湘城とする説（江漢86-1）もある。だが、どちらにしても、柏挙から直線距離で300km前後はある。
- ④㉕ 注（13）拙稿、頁55。

- (49) 『史記』趙世家。ただし、『戦国策』秦策一では三年、『韓非子』初見秦篇では三月となっている。
- (50) 『史記』田単列伝。
- (51) 注(3)。
- (52) 1982、中華書局。
- (53) 馬氏の『秦集史(上)』では恵王10年(前328)の上郡設置が最初になっている。
- (54) 馬氏の『秦集史(上)』では昭襄王21年(前286)とする。
- (55) 楊氏の注(3) 新版『戦国史』によると、陶郡は穰侯魏冉の死後、その封邑が郡とされたものであるが、前254年に魏に奪われたとしている。また、馬氏『秦集史(上)』は、上郡を昭襄王48年(前259)に秦の郡となったように記すが、楊寛氏は前著でその2年後に韓に奪われ、秦が奪い返したのは前247年としている。
- (56) たとえば、秦が韓の野王と邢丘を攻略してその上党郡を孤立させ、趙を長平に破ったのは(前262、前260、注(13) 拙稿参照)この第二期であり、秦軍による趙都邯鄲攻囲(前259、『史記』秦本紀)や上述の西周君の秦への降伏(前256)も同じ時期に入る。
- (57) 太田幸男「商鞅変法の再検討」(歴史学研究・別冊特集『歴史における民族の形成』1975-11)、頁119。ただし、宮崎定氏は、実際に小都市の合併を行ない、ある程度の大形都市を造営したとしている(前掲「戦国時代の都市」の注14)。
- (58) 注(1) 宇都宮論文、頁110。
- (59) 「釈《史記・貨殖列伝》所說的”陶為天下之中“兼論戦国時代的經濟都会」(『河山集』1963、三聯書店)、頁110。
- (60) 「春秋会盟地理考—両周地理考の二」(『田村博士頌寿東洋史論叢』1968)、頁35。
- (61) 「姫姓諸侯封建の歴史地理的意義」(『中国古代王朝の形成』1975、創文社)、頁247。
- (62) 貨殖列伝に見える前漢時代の「三河」の経済的重要性は、すでに日比野丈夫氏も注目している。ただし、氏は交通路の中心はこの時代になって東方の陶から西のこの地域に移動したと考えている(「史記貨殖列伝と漢代の地理区」(『中国歴史地理研究』1977、同朋社)頁9)。
- (63) 宇都宮氏も、『史記』貨殖列伝や『塩鉄論』によりながら、前漢時代の大都市は華北の東方交通線上に集中するとし、またそれは『漢書』地理志の戸口統計によって知られる大人口地帯とも重なるとしている(注(1)、頁112)。
- (64) ただし、戦国時代に盛んになる水路の開発によって新しい交通の中心が生れたことは当然考えられる。陶の発展がこれによるものである可能性は十分あるが、それによって従来の交通路が衰退したとは考えられない。
- (65) 三晋地域に人工の極端な都市集住もたらしたものとして、鉄器と牛耕の普及による生産力の増大にもとづく小家族の析出が想定されるが、鉄器、牛耕の普及がいつ頃から始まるかについては異論が存在する。私は春秋時代末頃から普及し始めるのではないかと考えている。
- (66) 注(13) 拙稿、頁43、46参照。
- (67) 劉竜啓、李振奇「河北臨城柏暢城発現戦国兵器」(文88-3)、頁50。
- (68) このような三晋兵器の銘文の読み方は黄盛璋氏の上掲注(32) 論文によって確定された。
- (69) 邢は趙地のもと邢国のあった地と韓、東周、魏に属した邢丘の二地が考えられるが、「執荊」の語と出土地からこの戈は趙の邢のものともみなされる。

- (70) 注(13) 拙稿頁44、表1参照。
- (71) 佐原泰夫氏も、三晋都市は長期の籠城戦に耐えることができるよう官僚的に財政機構が整備された軍事都市であったと理解している(注(12)論文)。
- (72) 注(23)。
- (73) 注(22) 拙稿、頁406。
- (74) 県令は漢代では明らかに皇帝の直任官であるが、戦国時代でも、鄴令となった西門豹の例(『韓非子』外儲説左下)でもわかるように君主が直接任命したようである。そして、戦国時代の県は、君主によって中央集権的に支配される直轄地として一般に理解されている(増淵龍夫「先秦時代の封建と郡県」〔『中国古代の社会と国家』1960、弘文堂〕、頁444)。
- (75) 注(3) 楊寛書新版、頁211。ならびに注(13) 拙稿、頁48参照。
- (76) 好並隆司「戦国魏政権の派閥構造」(東洋学報60-3・4、1979)、頁81。
- (77) 注(3) 楊寛書新版、頁173。
- (78) 『韓非子』内儲説下に「白圭相魏」とあり、また恵王の時の人物であることは貨殖列伝の該伝のく考証く所引の張文虎に考証がある。
- (79) 司馬遷も本伝で「蓋天下言治生祖白圭。白圭其有所試矣。能試有所長。非苟而已也」と言っている。
- (80) 宇野茂彦「魏の客士登用と孟軻」(中哲文学会報1、1974)、頁128。
- (81) 注(3)、頁180。
- (82) 『史記』老子韓非列伝。
- (83) 拙稿「「賢」の観念より見たる西漢官僚の一性格」(東洋史研究34-2、1975)、頁203。
- (84) 注(13)、頁51。
- (85) 中国の古代官僚は、必ずしも君主に対して隷属的な存在ではなく、きわめて自律的な側面も有していた(注(83)拙稿参照)。私は、現在、三晋地域の独立的な都市こそが、それに対応したこのような自律的な官僚を生み出したのではないかと考えている。
- (86) 注(22) 拙稿、頁444。以下の銅兵器、貨幣に関する具体的な論証も本稿の当該箇所を参照のこと。
- (87) 注(13) 拙稿、頁43。
- (88) く四年邾令輅戈く(奇觚10・27)、く十八年秦工戈く(河北144)など県令が最高統轄者となっている場合もあるが(注(22)拙稿、頁424)、きわめて例外的である。
- (89) 齊では、陳氏一族の勢力が強かったため中央集権化が妨げられたとする考えもある(太田幸男「田齊の成立」〔中国古代史研究会編『中国古代史研究 第四』1976、雄山閣出版〕、頁290)。
- (90) 岡田功「楚国と呉起変法—楚国の国家構造把握のために—」(歴史学研究490、1981-3)。
- (91) 解学東「先秦時期“重商”思想初探」(河南大学学报〔哲・社〕1985-6)、頁32。
- (92) 『史記』秦始皇本紀。注(13) 拙稿、頁56参照。
- (93) 『史記』秦始皇本紀に「徙天下豪富於咸陽十二万户」とある。
- (94) 『史記』秦始皇本紀に「発諸嘗逋亡人・贅壻・賈人、略取陸梁地、為桂林・象郡・南海、以適遣戍」とある。
- (95) 『史記』秦始皇本紀に「郡県少年苦秦吏、皆殺其守尉令丞、反以陳勝」とある。

- (96) 『漢書』高帝紀に「六年冬十月、令天下県邑城」とある。
- (97) 『史記』平準書に「高祖乃令賈人不得衣絲乘車、重租税以困辱之」とある。
- (98) 『史記』平準書に「孝恵・高后時、為天下初定、復弛商賈之律。然市井之子孫亦不得仕宦為吏」とある。
- (99) 注(83) 拙稿、頁203。
- (100) 『史記』平準書に「至孝文時、・・・令民縦得自鑄錢」とある。
- (101) 『都市の経済学－発展と衰退のダイナミクス』（中村達也、谷口文子訳、1986、TBSブリタニカ）、頁218。ここでは女史は、都市経済を不活性化する帝国の政策と取引の主要なものとして、（一）長期化した間断のない軍需生産、（二）長期化した間断のない貧困地域への補助金、（三）先進－後進経済間交易の重点的促進の三つを挙げている。

（本稿は、東洋史研究第48巻、第2号（平成元年9月30日発行）に掲載した同名の論文に補訂を加えたものである。）

Ⅲ 中国古代都市関係図表

- 1) 城址名蘭の番号は、1「西周・春秋都市遺跡表」では「西周・春秋都市遺跡ならびに国都分布図」の位地番号に、2-(1)「戦国都市遺跡表」では「戦国都市遺跡分布図」に、2-(2)「戦国出土文字資料地名表」では「戦国都市分布図」に、3「秦・漢都市遺跡表」では「秦・漢都市遺跡ならびに諸県分布図」の位置番号にそれぞれ対応する。
- 2) 規模蘭の(北)、(西)などは北城壁、西城壁を示す。たとえば、2700(西)とは西城壁の長さ2700mということである。また、数字を()でくくったものは推定の長さであることを示し、210-など数字の後ろに-を付したものはこの数字が残長であることを示す。
- 3) 出典については、末尾の「都市遺跡調査書目一覧」「著録等略称一覧」を参照のこと。

1 西周・春秋都市遺跡表

城 址 名	所在地	考古学的年代	規 模 m		城址内及び近辺の遺跡、出土遺物	地名比定			出 典
			東西	南北		西周	春秋	戦国	
001 白店古城	山西、侯馬	春秋	(800?)	(1000?)	上面に牛村、台神、平望古城疊圧				新中国273
002 戚城遺址	河南、濮陽	〃	(1万余㎡)				戚		中原86-4
003 古鄆城	〃、鄭州	〃	?		北城壁のみ存す。墓、銅器(春秋)		鄆		河南491
004 古厘城	〃、〃	〃	周長2000		城壁高3 m		厘		〃
005 鄒国故城	〃、密県	西周	422(北)	336(西)	城壁内包含物より西周のもの。陶片(仰韶、竜山、二里頭、殷、西周、漢)。城壁高5-7m(河南497)	鄒国			中原87-3
006 平桃城	〃、滎陽	〃	400	300	城壁高3m余	東虢			河南494
007 陳城遺址	〃、淮陽	春秋、(戦国)	周長4500		陶・瓦片、蟻鼻錢。城外に墓地(江漢85-2)	陳国	陳国	陳県	〃 632
008 南頓古城	〃、項城	西周	?		城壁高7m余。西北に墓地?(考89-4)	頓国	頓国		〃 634
009 翟集古城	〃、宝豊	春秋	周長2920		銅器(春秋)		父城		〃 615
010 丁河古城	〃、西峡	西周～漢	500-	500	門。城内に陶片(周、漢)、銅器、陶器(西周)		上都		江漢87-3
011 沈子国故城	〃、平輿	西周	周長2850		城壁あり。陶器(周代)				河南624
012 高店古城	〃、羅山	春秋	周長2000		城壁残存。城内より銅器(春秋)				〃 647
013 曲阜魯故城	山東、曲阜	西周～	?		下層に西周城壁残存。陶窯、銅器製作場(西周・春秋)、道路、住居址(西周・漢)、西周墓地(甲・乙組)	魯国	魯国	魯国	魯故城
014 牟国故城	〃、萊蕪	西周、春秋	?		陶器(西周中期)	牟国	牟国		文86-4
015 董家村古城	河北、北京	殷末	850-	?	(城壁は西周墓に打破)				五次年会

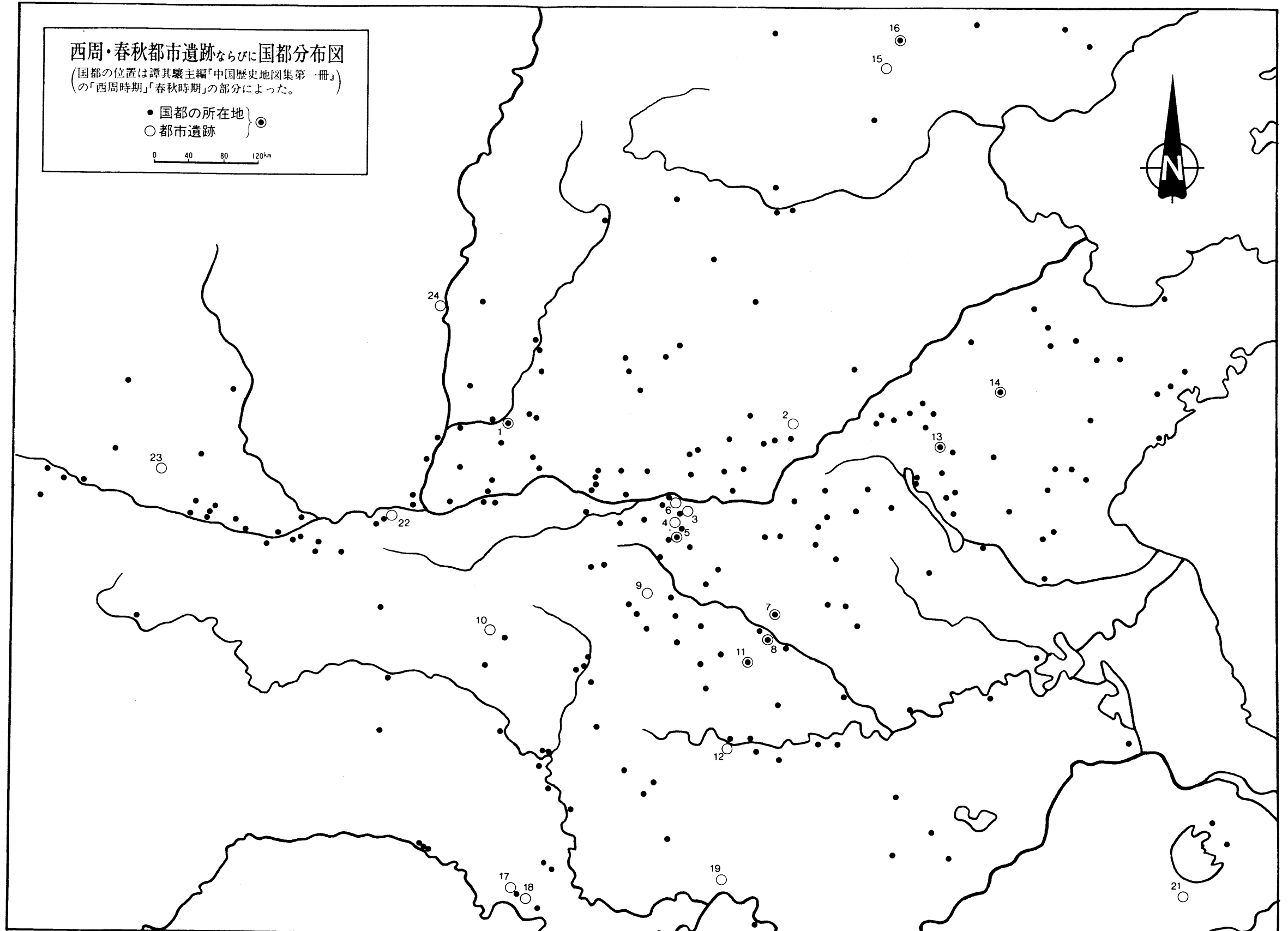
016 燕都城址	“、”	西周初	約850(北)	?	城壁(～殷末)、燕侯墓地(西周、文86-8)	燕国			文78-4
017 季家湖古城	湖北、当陽	西周、春秋	1400	1600	建築址、土台。陶・瓦片、銅鐘、銅建築部品。城外に墓地(江漢87-2)、陶器製作場(文80-10)	丹陽?	郢?		江漢80-2
018 陰湘城 (陽城古城?)	“、江陵	春秋	500	240	門、堀。陶器(東周)。城外に墓地(～戦国)		郢?		“ 86-1
			?		東周遺物。「冶父城」の可能性				(“ 82-2)
019 魯台山遺址	“、黄陂	西周	?		(西周城址の可能性あり)	荊国			“ 83-4
020 大箕鋪古城	“、大冶	春秋	周長1130		陶器(春秋)。(城壁内に東周遺物なし)				“
021 下菰城(外城) (内城)	浙江、湖州	西周?、春秋、宋	周長1800 “ 1200		陶片(殷、西周、春秋、東漢)、磁片(晋、唐、宋、明)				五次年会
022 鳶家窯古城	陝西、華県	西周後期-戦国初	400	300	陶片(東周、とくに戦国)。(城は春秋期に使用)				考学80-3
023 梁甫村古城址	“、隴県	春秋	?		(春秋古城遺址)。銅器(西周)				文博87-3
024 李家崖古城	“、清澗	殷、西周中期	495	213	土石による城壁、建築址、窯穴。陶器、石器、骨器、石彫人像、銅器(少)	鬼方?			考与文88-1 、同5・6、文 博87-3

西周・春秋都市遺跡ならびに国都分布図

(国都の位置は譚其驤主編『中国歴史地図集第一冊』
の「西周時期」「春秋時期」の部分によった。)

- 国都の所在地
- 都市遺跡

0 40 80 120km



2 - (1) 戦国都市遺跡表

城 址 名	所在地	考古学的年代	規 模 m		城址内及び近辺の遺跡、出土遺物	地名比定			出 典
			東西	南北		春秋	戦国	漢	
001 晋陽古城	山西、晋源	春秋、戦国、漢～	(3600?)	2700(西)	城内に陶片(漢)、唐代遺物	晋陽	晋陽	晋陽	文62-4・5
002 潞城古城	”、潞城	戦国	210-(北)	350-(西)	陶片(戦国)、城外に墓地(春秋中晩期～秦漢)				文86-6
003 長子古城	”、長子	春秋、戦国	590-	1840	瓦片(東周)。城西に墓地(東周)				考学84-4
004 洪洞古城	”、洪洞	戦国、漢	1300	580	城壁(戦国、漢)。城内に瓦、磚、陶導水管(漢)	楊国	楊氏	楊県	考63-10
005 趙康古城	”、襄汾	春秋末、戦国、漢	1650	2700	内城あり。城内に陶・瓦片(春秋末、戦国、漢)。建築址(漢)、堀、道路	聚	汾城	臨汾	”
006 故唐城	”、翼城	戦国～?	?				唐?		文82-7
007 北寿城古城	”、”	春秋、戦国	800	800	城内に戦国晩期層、「降亭」陶文	絳			”
008 故翼城	”、”	春秋～?	?			翼?			”
009 北絳故城	”、”	戦国～?	?						”
010 牛村古城	”、侯馬	春秋、戦国早	1400	1740	城内に建築土台。周辺に銅器・陶器・骨器製作場、居住址、墓地、盟誓遺址(みな春秋、戦国)	新田	新田		考59-5
平望古城		春秋、戦国中	(1100?)	(1300?)					侯馬盟書
台神古城		春秋、戦国	(1700?)	(1300?)					
馬莊古城			(500?)	(300?)					
程王古城		春秋、戦国前	600	500					文88-3
011 曲沃古城	”、曲沃	春秋、戦国、漢	3100(北)	2600-(西)	内城あり。城内に陶・瓦片(戦国、漢)、大形陶井	沃国	絳?	絳県	考59-5
012 大馬古城	”、聞喜	戦国、西漢	998(南)	980(東)	門、堀。城内に陶・瓦片(東周～西漢)、磚(西漢)	清原	曲沃?		考63-5

013 汾陰故城	”、万荣	戦国、漢	?		陶・瓦片(戦国)、瓦当(漢)		汾陰	汾陰	考59-4
014 禹王城	”、夏県	戦国初、漢	3565(南)	4980(西)	中城、小城あり。城内に陶・瓦片(戦国初-漢)		安邑	安邑	考63-9
015 古魏城	”、芮城	春秋末、戦国、漢	1150(南)	1268(東)	門。城内に陶・瓦片(戦国、漢)。墓(春秋末)	魏	魏		文62-4・5
016 華陰古城	陝西、華陰	戦国	140-(北)	285(西)	城門部に瓦(戦国初)、橋形方足布(戦国)		陰晋	華陰	考59-11
017 靈寿古城 (小城)	河北、平山	春秋、戦国	4000	4500	東城、西城あり。版築建築基礎、銅器(貨幣も)・鉄器・玉器・骨器・石器製作場、道路。城内外に王陵、墓地(みな戦国)		中山		第三次年会
			約1400	約1050	召王台(残高8.2、一辺61m)、建築址、瓦(戦国)、鏃				集刊5
018 藁城故城	”、藁城	春秋、戦国、西漢	48600m ²		城内に陶・瓦片				文叢1
019 元氏故城	”、元氏	戦国、漢	1100	1100	城内に陶・瓦片、磚(戦国、漢)、陶導水管			元氏	”
020 柏暢城	”、臨城	”、”	420	600	城内に陶片(戦国、漢)、銅器製作場。城外に墓地				文88-3
021 柏人城	”、内丘	戦国	?						河北33
022 柏人城	”、隆尧	春秋、戦国	?		城壁(春秋、戦国)				文88-3
023 固鎮城	”、涉県	戦国	?						河北33
024 午汲古城	”、武安	戦国、漢	889	768	城内に陶窯(戦国、東漢)、建築址、道路、井戸。城内外に墓地(周、漢)。陶文		武安	武安	考通57-4
025 趙王城(東)	”、邯鄲	戦国	926	1442	城内に陶・瓦片、鉄器(戦国、漢)、建築土台・基礎、道路、井戸。近郊に王陵、墓地(考62-12、考82-6)	邯鄲	邯鄲		文81-12 集刊4 (河北31)
” (西)			1354	1390					
” (北)			1410	1520					
大北城		戦国、漢	3240	4880	城内に建築基礎、陶器・鉄器・骨器・石器製作場(戦国、漢、考80-2)			邯鄲	
026 白陽城	”、磁県	戦国	?						河北33

城 址 名	所在地	考古学的年代	規 模 m		城址内及び近辺の遺跡、出土遺物	地名比定			出 典
			東西	南北		春秋	戦国	漢	
027 講武古城	河北、磁県	戦国、漢 (漢)	1140(北) (1100)	1277(西) (1150)	城内に陶・瓦片、銅鏃、尖足布(戦国) 城内に磚、瓦、陶器、鉄器。(三十年は漢とする)			武城	考59-7 (三十年)
028 孔悝城遺址	河南、濮陽	(周代)	周長1520		城内に周代遺物				河南516
029 戚城遺址	”、”	西周～西漢初	1 万 m ²		城壁。城内に大量の周漢遺物	戚			中原86-4
030 呉起城	”、延津	戦国	周長7600		城は南北長く、東西短い				河南537
031 共城	”、輝県	西周末～	1200	1300	門、堀。城内に建築址(春秋・漢)、墓(～春秋早)	共国	共	共県	中原83特
032 焦作古城	”、焦作	周～漢	295.5(北)	277(西)	城内に陶片(殷・漢)				文58-4
033 州城	”、温県	春秋、戦国	1680	1780	堀。城外に盟誓遺址(春秋末?)	州	州	州県	文83-3
034 北平皋古城	”、”	春秋、戦国、漢	周長4000余		城内に大台地、陶片(東周、漢)、「邢公」陶文	邢国	邢丘	平皋	文82-7
035 邴邴古城	”、沁陽	周、漢	53万 m ²		東城(三門あり)、西城あり。墓(周、漢)	邴国			河南529
036 軹城古城	”、濟源	戦国、漢	周長8000		城壁版築層9~11cm。石器、銅器、陶器、鉄器		軹	軹県	” 531
037 宜陽古城	”、宜陽	戦国	1810	2220	門。城内に陶・瓦片(戦国、考61-1)、銅兵器、瓦		宜陽	宜陽	中原88-3
038 東周王城	”、洛陽	春秋、戦国、漢	2890(北)	3000-(西)	城内に建築址(東周)、陶器・骨器・石器製作場、道路、穀物倉、墓地(東周、漢)	周	周	河南	考学59-2
039 古城遺址	”、伊川	(周代)	?		周代古城址				河南572
040 古城廃墟	”、汝陽	周～漢	約数万 m ²		陶・瓦片(周～漢)				考58-1
041 劉国故城	”、緱氏	春秋鮮、戦国初	650	1220	南面のみに城壁。城門、堀、建築址、道路、瓦、磚、陶片(春秋・漢)。城外に墓地(春秋、戦国)	劉国			中原85-4
042 慶陽故城	”、臨汝	戦国	周長6800				慶陽		河南576

043 滑城	〃、偃師	春秋、戦国、漢	1000(北)	2000	城内に陶・瓦片(東周、漢)	滑国	猴氏	猴氏	考64-1
044 米北遺址	〃、鞏県	戦国	110	350	石積城壁。瓦、陶片(戦国)				中原86-4
045 陽城	〃、登封	春秋、戦国、漢	700	2000	城内に建築址、貯水池、井戸、陶・瓦片。城外に鉄器製作場(春秋、戦国)	陽城	陽城	陽城	文77-12
046 大索城	〃、滎陽	春秋、戦国	1000	500	北壁に東周版築				河南494
047 小索城	〃、〃	〃、〃	1000	600	城南に陶器製作場(「格氏」「左司工格氏」等陶文)		格氏		〃
048 京襄城	〃、〃	〃、〃	1500	2000	城壁高6 m	京城	京	京県	〃
049 滎陽故城	〃、〃	戦国、漢	2012(南)	2016(西)	城内に陶・瓦片。城外に鉄器製作場(戦国~東漢)		滎陽	滎陽	中原83特
050 河陰故城	〃、〃	戦国	500-(南)	400-(西)	陶・瓦片(戦国)				中原86-4
051 常廟城址	〃、鄭州	戦国、秦漢	周長5000余		城壁。陶・瓦片(戦国、秦漢)、「公」「亳」陶文				〃
052 鄭州商城	〃、〃	殷、戦国、漢	1700(南)	1870(西)	城内に建築址、陶・瓦片(戦国)	管	管		文叢1
053 道李故城	〃、〃	春秋、戦国	?		城壁残存。陶片(春秋、戦国)				中原86-4
054 西古城遺址	〃、中牟	〃、〃	周長2000		版築城壁				河南504
055 東古城遺址	〃、〃	〃、〃	周長2000		布銭(戦国)				〃 503
056 華陽故城	〃、新鄭	〃、〃	周長5000		城内に東周文化層1~3 m(陶器、銅鉄)	華陽	華陽		〃 500
057 鄭韓故城	〃、〃	春秋、戦国、漢	5000	4500	東城、西城あり。西城内に建築址、小城址。東城内に銅器・鉄器・陶器・玉器・骨器製作場。城内外に墓地(みな戦国)	鄭国	鄭	新鄭	文叢3
058 康城村古城	〃、禹県	戦国	周長3000		大規模な城壁残存				河南598
059 八里營古城	〃、〃	〃	周長3000		東北角城壁残存		陽翟	陽翟	〃
060 古城村古城	〃、〃	〃	周長5200		城壁高5 m余				〃

城 址 名	所在地	考古学的年代	規 模 m		城址内及び近辺の遺跡、出土遺物	地名比定			出 典
			東西	南北		春秋	戦国	漢	
061 鄢陵古城	河南、鄢陵	春秋、戦国	998(北)	1595	内城あり。城内に建築址、陶・瓦片(春秋、戦国)	鄢城	安陵	偃陽	考63-4
062 扶溝古城	〃、扶溝	春秋、戦国、漢	480 (1000)	800 (1500)	堀。城内に建築土台(春秋)、鉄器製作場(東漢)、陶導水管、金銀幣(戦国)、陶・瓦片(春秋、戦国)	曲洧		新汲	中原83-2 (文80-10)
063 西不羹城址	〃、襄平	春秋～漢	周長1500		夾砂紅陶片、縄紋瓦片				河南602
064 北舞渡古城 (東不羹城)	〃、舞陽	周～漢 (春秋～漢)	周長5500		城内に陶・瓦片、磚(漢)、陶導水管。城外に墓地(漢)。郢爰、楚貝、鏃布、銅器。井戸	不羹 ?	舞陽	舞陽	考通58-1 (河南606)
065 合伯故城	〃、〃	東周～漢	周長6500		陶器、鏃布、水道管(戦国)、鉄器、印、五銖錢(漢)				河南606
066 斗城故城	〃、遂平	戦国、漢	周長2086		城内に戦国、漢遺物				〃 619
067 呉房故城	〃、〃	春秋、戦国	周長3775		版築層12~14cm				〃
068 蔡国故城 (上蔡故城)	〃、上蔡	春秋、戦国	2700(南)	3187(西)	堀、門。城内に台地(春秋、陶・瓦片)、陶窯(春秋)、井戸、陶導水管。郢爰、蟻鼻錢、銅器	蔡国	上蔡	上蔡	江漢85-2
069 商水古城 (扶蘇城)	〃、商水	戦国晩、西漢	800	500	城内に磚・瓦片(戦国、秦漢)、陶導水管。鉄器製作場(戦国)、磚瓦窯(西漢)。「扶蘇司工」陶文		陽城	陽城	考83-9
070 宋国故城	〃、商丘	(周代)	周長約10000		陶豆、縄紋瓦片(戦国)	宋国	宋国		河南585
071 西峡古城	〃、西峡	戦国、漢	500(南) (800)	750(西) (850)	城内に陶・瓦片、古墓(考通56-2)。蟻鼻錢、銅鏃(戦国、中原86-1)	郢国	析邑	析県	江漢85-2 (考通56-2)
072 南陽古城	〃、南陽	～漢	?		城壁。陶・瓦片、瓦当、井戸、銅鏃(戦国・文60-1)				考通56-2
073 楚王城遺址	〃、信陽	戦国	周長3587		城壁残存。銅劍、郢爰、筒瓦		郢		河南639
074 建安故城	〃、正陽	(春秋、戦国)	周長10000		城内に郢爰				〃 625
075 息国故城	〃、息県	(周代)	周長2532		城壁残存。陶・瓦片(東周)	息国			〃 641

076 新蔡故城	〃、新蔡	春秋、戦国	周長3215		城壁残存。鼎、豆、壺、孟(春秋)				〃 624
077 黄国故城	〃、潢川	春秋、戦国、西漢	1800(南)	1650(東)	堀、城門、井戸、土台、銅鏃、螭鼻錢、銅器製作場	黄国			中原86-1
078 蒋国故城	〃、淮濱	春秋、戦国、漢	1700	500	井戸。陶・瓦片、郢爰、螭鼻錢、銅器(戦国)	蒋国	期思	期思	中原83特
079 蓼国故城址	〃、固始	春秋、戦国	2325(北)	5800(東)	内城あり。陶片、銅器(東周)、郢爰。墓(春秋)	蓼国	潘国	寝県	〃
080 曲阜魯故城	山東、曲阜	西周晩~漢	3560(北)	2531(東)	内城あり。銅器・鉄器・陶器・骨器製作場	魯国	魯国	魯県	魯故城
081 東周故城址	〃、泗水	春秋、戦国	800	700	瓦片、半瓦当、陶井(西周末、春秋)、五銖錢(漢)				考65-1
082 紀王城	〃、鄒県	西周?~漢	2530(南)	1180(西)	土台。陶・瓦片(西周~漢)、陶文(戦国)	邾国	鄒	驪県	考65-12
083 康王城	〃、〃	春秋、戦国	300	500	陶文(東周)、磚、瓦(漢)				考古集刊3
084 滕城(内城)	〃、滕県	西周?~漢	850(南)	590(西)	外城未発見。土台。陶・瓦片(西周~漢)、陶量	滕国	滕国		考65-12
085 薛城	〃、〃	西周末?~漢	3265(北)	2480(東)	製鉄遺址(戦国、文参57-5)、陶・瓦片(西周~漢)	薛国	薛	薛県	〃
086 蕪県集古城	安徽、宿県	戦国、漢	?	1000	城壁、郢爰、螭鼻錢、陶片(戦国、漢)		蕪県	蕪県	文78-8
087 臨淄(西城)故城(東城)	山東、臨淄	春秋~漢	3316(北) 1404(北)	5209(東) 2274(西)	東城(外城)、西城(内城)あり。門、堀、土台、道路、排水路。鉄器・銅器・貨幣・骨器製作場、墓地	臨淄	臨淄	臨淄	文72-5
088 安平故城	〃、〃	(戦国?)	?		陶文(戦国)				文88-2
089 "臧台"故城	〃、益都	(〃?)	?		陶文(戦国)				〃
090 杞国故城	〃、安丘	戦国、漢	?		銅器(春秋、戦国)、瓦片(戦国、漢)、鉄刑具(漢)	杞国	杞	淳于	文86-3
091 盤古城	〃、五蓮	戦国	236	213	陶片、銅兵器(戦国)、「左柎正木」銅印				〃
092 靈山衛故城	〃、胶南	〃	?		陳氏三量				〃
093 燕上都	河北、北京		?		半瓦当、明刀錢(戦国)	薊	薊	薊県	考80-2
094 蘆村古城	〃、房山	戦国、漢	1400	800	内城あり。陶・瓦片、瓦当(戦国~漢)				文59-1

城 址 名	所在地	考古学的年代	規 模 m		城址内及び近辺の遺跡、出土遺物	地名比			出 典
			東西	南北		春秋	戦国	漢	
095 長溝古城	河北、房山	戦国、漢 (漢)	500 360(南)	500 500(西)	陶・瓦片、瓦当(戦国-漢) 陶・瓦片、半瓦当。考63-3は漢とする			西郷	文59-1 (考63-3)
096 蔡莊古城	”、北京	戦国末、西漢	300	300	陶・瓦片、半瓦当(戦国末)				文59-5
097 燕下都(西城) (東城)	”、易県	戦国、漢	4452(北) 4594(北)	3717(西) 3980(東)	西城は東城(戦国初)より後。城内に銅器・陶器・ 骨器、貨幣製作場、墓地		武陽		考学65-1
098 唐県古城	”、唐県	戦国~	750	750	陶片(戦国)				文57-8
099 鄧城	湖北、襄陽	春秋、戦国	?		城外東北に山湾墓地(春秋中期-戦国晩期)	鄧国			江漢83-2
100 欧廟土城	”、襄樊	”	2250	4200	門。陶井、陶器、瓦、瓦当、鉄器				江漢80-2
101 鄧故城 (楚皇城)	”、宜城	春秋、戦国、秦漢	1500(南)	2000(東)	門。銅器(東周)、鄧爰、螭鼻錢、「漢夷邑君」印(江 漢80-1)	鄧	鄧郢	宜城	江漢85-2 (考80-2)
102 紀南城	”、江陵	春秋~三国	4202(南)	3751(西)	城内に銅器・陶器製作場、井戸、墓地、版築基礎	郢?	郢		考学82-3、4
103 安居古城	”、随州	春秋~漢末	(800)	(1000)	城壁未発見。北部に台地(130×150m)、陶・瓦片、 瓦当	随国	随		江漢84-4
104 雲夢古(東城) 城 (西城)	”、雲夢	春秋~秦漢	700 900	1000 1000	堀、門、水門、土台3。陶・瓦片(春秋-秦漢)、磚(漢)。城外に墓地(戦国早-秦漢)		安陸	安陸	江漢83-2
105 呂王城	”、大悟	戦国	(殘長100)		城壁内に春秋遺物、水井、建築材料、銅渣、鉄渣				江漢85-3
106 作京城	”、黄陂	戦国、漢	200	144	堀、門、建築址、瓦、磚、鉄器、銅器、陶器				江漢85-4
107 禹王城	”、黄冈	(東周)	?				邾		江漢87-1
108 草王嘴古城	”、大冶	(”)	周長945		陶・瓦片(東周)、銅器製作場、井戸。城外に墓				江漢84-4

109 鄂王城 (鄂故城)	”、”	(”)	500	400	鉄器、銅器(東周・漢)、陳爰、墓地。陶・瓦片、瓦当。 門、堀、建築址、窯址(江漢85-2)	鄂	鄂		江漢83-3
110 西古城	安徽、六安	戦国	(20万m ² 以上)		蟻鼻錢、「大莫驚」印	六国			文88-2
111 邗城	江蘇、揚州	春秋～漢	1980	1400	内城あり(1400×1100m)	邗城	広陵	広陵	文79-9
112 淹城	”、常州	(東周?)	(850?)	(700?)	二重の内城あり。銅器				文59-4
113 古閶閭城	”、無錫	春秋、戦国	周長1500		陶器				考58-1
114 越城(越王城)	”、蘇州	春秋末	400	450	陶器、銅器(西周、春秋)。西北に土壁高4.5m				考82-5
115 雍城	陝西、鳳翔	春秋～漢	3300(甫)	3200(西)	建築址(宗廟、凌陰)。城外に墓地、秦公陵園	雍	雍	雍県	考与文85-2
116 咸陽故城	”、咸陽	戦国、漢	(902?)	(576?)	宮殿址、陶器製作場(陶文)、錢範、瓦当		咸陽		” 88-5・6
117 櫟陽故城	”、臨潼	”	2500	1600	城内に陶器、鉄器製作場、錢範		櫟陽	櫟陽	考学85-3
118 古城莊古城	山西、襄汾	東周～漢	(1500)	(1000)					集刊6
119 毛張古城	”、曲沃	戦国、漢	(500)	(600)					”
120 故城村城址	”、翼城	東周～漢	(450)	(500)					”
121 鉄匠营古城	”、臨猗	”	(1500)	(1000)					”
122 城東村古城	”、”	東周	(1500)	(1000)					”
123 古城村城址	”、永濟	”	(1200)	(1000)					”
124 牛皋村古城	”、芮城	”	(204)	(156)					”
125 古城村古城	河南、宝豊	春秋、戦国	?		陶器、銅鏃(東周)、鉄権(秦)				中原88-2
126 雍丘故城	河南、杞県	～戦国	(残長1000)		版築痕徑8cm。瓦片、瓦当	雍丘	雍丘	雍丘	中原86-3
127 城子崖故城	山東、濟寧	(東周)	?		城壁残高2.5m				考83-6

城 址 名	所在地	考古学的年代	規 模		城址内及び近辺の遺跡、出土遺物	地名比定			出 典
			東西	南北		春秋	戦国	漢	
128 焦国故城遺址	山東、嘉祥	戦国	?		「梁」「安邑」橋形布		焦国		文89-5
129 商邑遺址	陝西、丹鳳	〃	(約1100)	(約1500)	城壁わずかに残存。磚、陶・瓦片(「商」瓦当、「王」陶文)。銅剣、鏃、帶鉤		商		考89-7

補遺（「戦国都市遺跡分布図」の枠内に入らないもの）

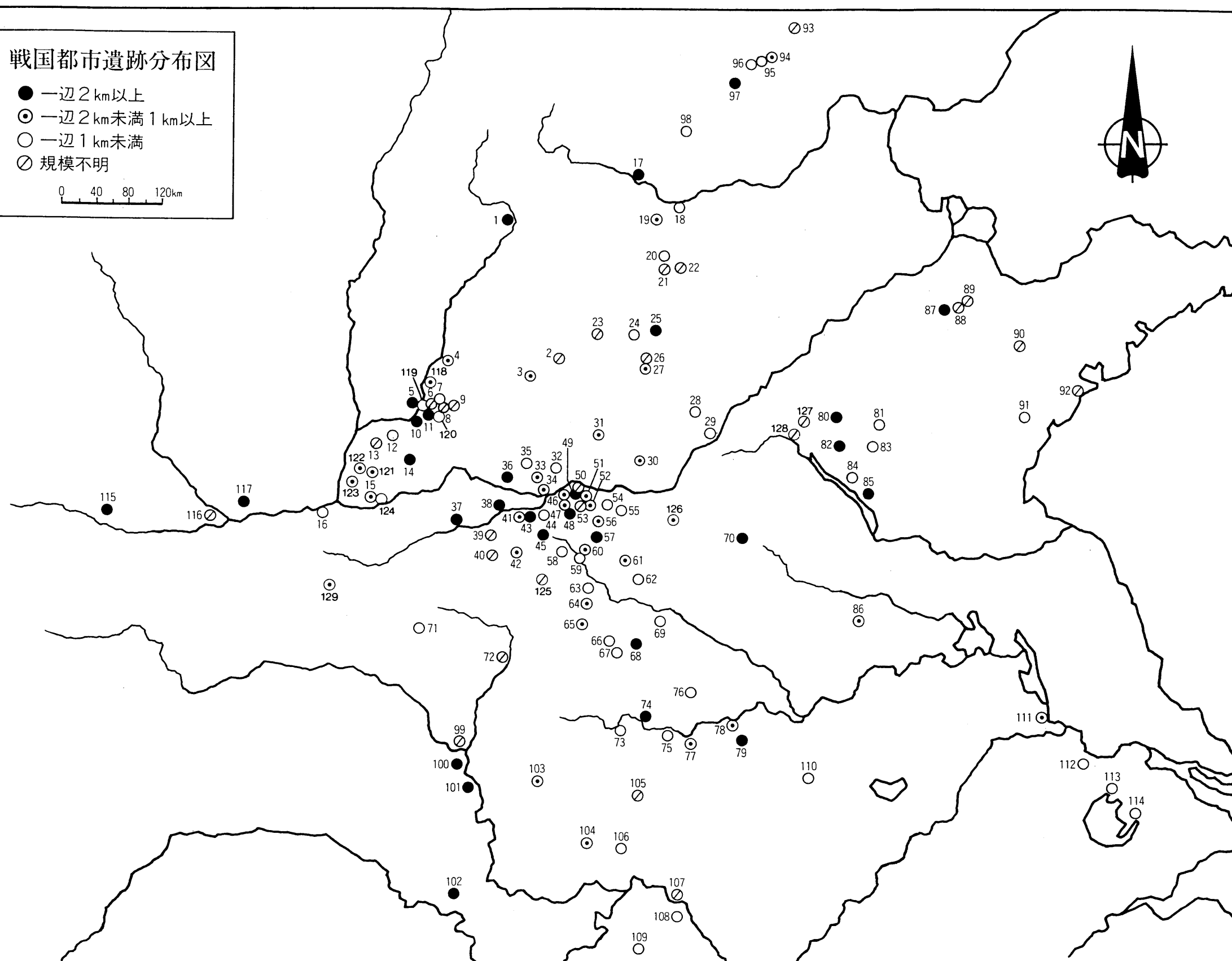
補1 黒城(花城)	遼寧、寧城	戦国	200	280-	少量の陶・瓦片				考82-2
補2 大古城(東城) 村古城(西城)	河北、懷来	戦国、漢	500 1500	500 1000	陶・瓦片(戦国、漢)、刀・布銭、五銖銭、銅鏃、王莽銭範(考88-8)			汨陽	考通55-3
補3 小古城	〃、〃	戦国	400	400	西城壁のみ。陶片(戦国)				考88-8
補4 東台子古城	〃、圍城	戦国晩、秦	?		城西に居住址(鉄権(秦)、瓦当、陶・瓦片、明刀銭銅鏃、帶鉤)、城北に墓地(戦国晩、秦)				文叢10
補5 北山根古城	内蒙、昭烏達盟	〃	250-(補)	60-(東)	遺物(戦国が主)				文85-4
補6 四道湾子遺址	内蒙、敖漢旗	戦国	(1000余)	(500)	城壁未発見。陶片、建築址、甕棺墓。「狗沢都」陶文		狗沢?		考89-4
補7 白斯郎营子城址	〃、〃	〃	?		十坑竖穴墓(戦国)				〃
補8 老虎山城址	〃、〃	戦国、秦、漢初	(500)	250(東)	陶・瓦片(戦国、秦漢)、鉄権、鉄農具、方足布、明刀銭、半両銭				考76-5
補9 二竜湖古城址	吉林、梨樹	戦国、漢初	183(補)	193(東)	陶器、鉄器、銅器(戦国、西漢)				考88-6
補10 古城堤城址	湖南、石門	春秋、戦国	600	300	陶片(～春秋、戦国)				考64-2

補11 古羅城	”、湘陰	春秋～漢	490	400	陶片(春秋、戦国)	羅国			考通58-1
補12 築衛城	江西、清江	”	410	360	城壁は春秋文化層の上にあり。柱穴、陶器				考76-6

戦国都市遺跡分布図

- 一辺 2 km 以上
- ⊙ 一辺 2 km 未満 1 km 以上
- 一辺 1 km 未満
- ⊗ 規模不明

0 40 80 120km



2 - (2) 戦国出土文字資料地名表

1. 城址欄の番号は2 - (1) 「戦国都市遺跡表」の番号と対応する。
2. 所在地、貨幣、銅器欄の鄭は鄭家相『中国古代貨幣発達史』(1958、三聯書店)、王は王毓銓『我国古代貨幣の起源和發展』3957、科学出版社)、黄は黄盛璋「試論三晋兵器的国別和年代及其相關問題」(考古学報1974-1)、譚は譚其驥『中国歴史地図集第一冊』(1982、地図出版社)の地名比定であることを示す。(その他巻末略称一覧参照)
3. 貨幣、銅器、その他の欄の「」内の文字はそれぞれの器物に見える製造地名を示す。(ただし、○印は地名欄の地名と同一であることを示す)

地 名	城址	所 在 地	貨 幣	銅 器	そ の 他
001 霍		山西平陽西(鄭) [山西霍県(王)]	尖足布「藿人」		
002 新城		山西朔平朔州(鄭) " 朔県(王) [河南洛陽南(王)] [" 伊川(黄)]	尖足布 ○「辛成」 方足布(黄)		
鄆		[漢志「雁門鄆県」 (王、黄)] 山西平陸(王)	尖足布「鄆」(黄)	武器「鄆」(黄)	
003 孟		山西陽曲東北(鄭)	尖足布「于」		
004 晋陽	1	山西大原(鄭、王)	尖足布「晋易」 橋形布「 " 」 円足布「 " 」 円銭「晋」 直刀「晋易」「晋」	武器○(小校10・14)	
005 榆次		山西榆次西北(鄭)	尖足布「榆郷」 方足布「 " 」		
006 陽邑		山西太谷東北(鄭) " 東南(王)	尖足布「陽(易)」 陽(易)丘」「大易」 方足布 ○「陽丘」	武器「陽」(三代20・2)	
007 関与		山西和順(譚)		武器「関輿」(山西117)	
008 祁		山西祁県東南(鄭) " 東北(王)	方足布 ○		
009 茲氏		山西汾陽(鄭、王、黄)	尖足布 ○「茲」 円足布 ○「茲」	武器 ○	

地 名	城址	所 在 地	貨 幣	銅 器	そ の 他
010 西都		山西孝義(鄭、王)	尖足布 ○		
011 中都		山西平遙西北(鄭) " 東北(王) " 西(文72-4)	尖足布 ○ 方足布 ○		
012 平周		山西介休西 (鄭、王)	尖足布 ○[「平陶」 考80-1)] 円足布 ○	武器？(文87-1)	
013 鄆		山西介休東北(王) [河南偃師南(鄭)] [" 西南(王)]	方足布 ○「烏氏」		
014 漆垣		陝西葭県		武器「秦」(文77-5) 9) 権「漆」(文84-	
015 蘭		山西永寧西(鄭) " 離石西(王)	尖足布 ○ 方足布 ○ 円足布 ○ 円銭 ○ 直刀 ○		
016 離石		山西永寧西(鄭) " 離石西(王)	尖足布「離石」 円足布「 " 」 円銭「 " 」		
017 中陽		山西寧郷西(鄭) " 中陽(王)	尖足布 ○		
018 涅		山西武郷西 (鄭、王)	方足布 ○		
019 上党		山西沁県一帯(黄)		武器 ○(黄)	
020 襄垣		山西襄垣北 (鄭、王)	方足布「數垣」		
021 銅鞮		山西沁県南(鄭) " 東南(王)	方足布「同是」		
022 屯留		山西屯留東南(鄭) " 東(王)	方足布 ○		
023 潞	2	山西潞城(鄭)	方足布「露」「零(路)	武器「露」(黄)	

地 名	城址	所 在 地	貨 幣	銅 器	そ の 他
		山西潞城北(王) " 長治東北(文 72-4)		(文86-6、文博 87-2)	
024 長子	3	山西長子西 (鄭、 " 長子(王) 黃)	方足布「鄔子」	武器(黃) 容器(黃)	
025 蒲子		[平陽蒲子県(鄭)] 山西潞県東北(王、 黃)	尖足布「蒲子」 方足布「"」	武器「蒲子」 (黃)	
026 虢		[霍州虢城(鄭)] 山西霍県東北(王)	方足布「虢邑」 橋形布 ○	武器 ○(黃)	
027 大陰		[霍州呂郷(鄭)] 河南西北部(王)	尖足布 ○ 円足布 ○		
028 北屈		山西吉州東北(鄭) " 西南部(王) " 吉県東北(文 72-4)	方足布 ○		
029 平陽		山西臨汾西南(鄭、 王) [河南臨漳(王)] [" 滑県東南(")]	方足布 ○「平易」	武器「平陽」(三代19・44)	
030 皮氏		山西河津西 (鄭、 王)	方足布 ○		
031 (新田)	10	山西侯馬(譚)	大型空首布(製作 場、文60-8・9)	陶範(製作場、 考62-2等)	(陶器、骨器製作場 、文59-6)
032 安邑	14	山西夏県(鄭、王)	橋形布 ○	容器(文75-6)	
033 垣		山西垣曲東南(譚) [河南長垣東北(鄭)、 " 西北(王)]	橋形布 ○ 円錢 ○	容器(文博89- 2→山西垣曲西)	
034 虞		山西平陸東北(鄭)	橋形布 ○ 円錢「虞鉏」(王)		
035 榮錡氏		河南鞏県西南(鄭) [山西猗氏(考65-4 、 " 臨猗南(文72	方足布「奇氏」		

地 名	城址	所 在 地	貨 幣	銅 器	そ の 他
		-4)]			
036 蒲坂		山西永濟東南(王) [" 平陸北(鄭)]	橋形布「甫反」	武器「甫反」 (考89-1)	
037 陰晋	16	陝西華陰東南(王、 [" 華陰(鄭)] 黄)	方足布(黄) 橋形布 ○	武器 ○(黄)	
038 焦		河南陝県(黄)		武器(黄)	
039 虢		河南陝県東南(王)	尖足布「鄂」		
040 盧氏		陝西雒南と河南嵩 県の間(鄭) 河南盧氏(王)	小型空首布 ○ 鋭角方足布 ○		
041 (中山)	12	河北靈寿(譚)	直刀「成白」(製作 場、三次年会)	(製作場、三次 年会、右同)	(鉄器・骨器・玉器・ 石器製作場)
042 緄		河北欒城東北(黄)		武器(黄)	
043 柏人	21	河北唐人西(鄭) " 堯山西(王) " 隆堯(文65-1)	直刀 ○「白」		
044 邢		河北邢台		武器「莖」(文8 2-9)、「型」(文 88-3)	
045 馬服		河北邯鄲西北(鄭) " 西(文72- 4)、位置不明(黄)	方足布「馬服邑」	武器「馬雍」(黄)	
046 武安	24	河南武安西南(王) [潞州武安(鄭)]	尖足布 ○		(陶器製作場、考通 57-4、河北)
		[河南修武(鄭)] [河南武安(王)]	空首布 ○「武」		
047 邯鄲	25	河北邯鄲西南(鄭) " 趙王城(黄)	大型空首布「甘丹」 尖足布「甘丹」 直刀「甘丹」	武器「甘丹」 「肖」(黄) 容器(黄)	(陶器・鉄器・骨器・ 石器製作場、考80 -2)
048 鄴		河南磁県古鄴城 (黄)		武器「業」(黄)	

地名	城址	所在地	貨幣	銅器	その他
049 平邑		河南南樂東北(鄭)	方足布 ○「平氏」		
050 頓丘		河南濬県北十里鋪、衛河東岸(黃)		武器「邲丘」 (黃)	
051 朝歌		河南淇県(黃)		武器「朝訶」 (黃)	
052 共	31	[衛輝府輝県(鄭)] 河南輝県(王)	大型空首布 ○ 方足布「共邑」 橋形布 ○ 円錢 ○	武器「𢇛」 "「邲」(三代19・29)	
053 高都		河南洛陽西南(鄭) " 南(王) [山西晋城東北(王)、 " 東(文72-4)、 " 北、高都鎮(黃)]	方足布 ○	[武器○(黃)]	
054 長垣		[秦地名、魏では垣(鄭)] 河南長垣(譚)	円錢 ○		
055 酸棗		河南延津西南(鄭)	方足布「酉棗」		
056 脩余		河南原武東(黃)		武器 ○(黃)	
057 安城		河南陽武、原武の間(鄭) " 原武東南(黃)	空首布「安(臧)」 円錢「 " 」	武器「安成」 (黃)	
058 寧		河南修武東(黃)	[方足布(黃)]	武器 ○(黃) 容器 ○(")	
059 宅陽		河南滎陽東南(鄭) " 東(王、文72-4)	方足布 ○「毛易」		
060 隰城		河南武陟西南(鄭) [山西離石西(文72-4)]	方足布「隰成」		
061 山陽		河南修武西北(鄭、王) [陝西山陽(王)]	橋形布 ○		

地 名	城址	所 在 地	貨 幣	銅 器	そ の 他
062 邶	35	河南沁陽西北(鄭、王、文57-8)	方足布「于爻」	武器(奇觚10・27)	
063 州	33	河南沁陽東南武德鎮(黃)		武器「口州」 容器 (黃)	
064 邢丘	34	河南溫縣北平皋村(文82-7)			陶器「邢公」「公」 (文82-7)
065 東周		河南洛陽の「成周」(鄭) " 鞏県(王)	方足布(考65-4) 空首布 ○ 円錢 ○	容器(金村)	
066 平陰		河南孟津西北(鄭) " 洛陽北、一説には孟津東(王)	方足布 ○		
067 西周 (王城)	38	河南洛陽王城(鄭)	円錢 ○	武器?	(陶器・骨器・玉器・製作場、考61-4)
068 宜陽	37	河南宜陽西(鄭)	方足布 ○「宜易」	容器○(文87-2、文博89-2)	
069 新城	39	河南洛陽南(王) " 伊川(黃) [山西朔平朔州(鄭)、" 朔県(王)]	[尖足布○「辛成」] 方足布(黃)?	武器「辛城」 (黃)	
070 綸氏		河南登封西潁陽鎮(黃)	方足布(黃)?	武器「命氏」 (黃)	銀器「鄺氏」(黃)
071 陽人	42	河南臨汝西、汝陽東(黃)	尖足布(黃)?	武器 ○(黃)	
072 陽城	45	河南登封東(鄭) " 東南告成鎮(黃)	方足布「陽成」	武器 ○(黃)	陶器 ○(古文字7)
073 京	48	河南滎陽東南(鄭) " 東北(王)	橋形布 ○		
074 滎陽	49	河南鄭州西北古滎鎮(中原84-2)			陶器 ○(中原84-2) (製作場)、(鉄器製作場、中原83特)
075 管	49	河南鄭州北(鄭)	空首布「官考」		陶器「亳」(中原81-1)

地 名	城址	所 在 地	貨 幣	銅 器	そ の 他
076 梁(大梁)		河南開封(鄭、王、 黄)	方足布「梁邑」 橋形布 ○	武器(黄) 容器(〃)	
077 啓封		河南開封近辺(考8 1-4) 〃 東南(譚)		武器(考80-5)	
078 鄭	57	河南新鄭鄭韓故城 (黄)		武器 ○「奠」 (黄) 容器(〃) (製作場、文叢 3)	漆器 ○(文81-1) [裘錫圭は鄭県(陝 西華県)] (陶器・ 鉄器・骨器・玉器製 作場-文叢3)
079 雍氏	60	河南禹県東北(黄)		武器「雍」(黄)	
080 梧		河南許昌、鄆陵一 帯(黄)		武器「鄆」(黄)	
081 許		河南許昌東(鄭)	方足布「午邑」		漆器 ○(考81-1)
082 桐丘		河南鄆陵東南(考8 7-12)		武器 ○(考学 86-3)	
083 魯陽		河南魯山(鄭) 〃 中部(王) [「漁陽」と読んで 河北密雲(考69-5 、文72-4)、「呉城」 と読んで山西平 陸北(考80-1)]	方足布 ○ 三孔布 ○		
084 申陰		河南南陽北(黄)		武器「邲陰」 (黄)	
085 陳		河南淮陽(譚)	金版 ○(考73-3)		
086 武平		河南鹿邑西(鄭) 〃 北部(王) [河北文安北(黄)]	尖足布 ○?	武器 ○(黄) ?	
087 鄆		山東鄆城北(譚)		武器「壘」(三 代19-27)	
088 阿		山東東阿西南(譚)		武器「平壘」 (小校10・25、3 0、31)	

地 名	城址	所 在 地	貨 幣	銅 器	そ の 他
089 平原		山東武城西北(鄭) " 平原(王)	方足布「平备」		
090 譚		[古譚国=山東歷 城東南(鄭)] [" = " 濟南以東 龜山城子崖(王、 文72-5)] ※以上ともに春秋 期の貨幣とする	刀錢「簠邦」(鄭)		
091 無塩		山東東平東(綴遺3 0・19、譚) [塩氏=蒲州安邑 県(奇觚10・10)]		武器「亡塩」 (綴遺30・19、 文83-12)	
092 平陸		山東汶上(譚)		武器「平奎」 (三代20・9)	
093 倪		山東滕県東北(譚)		武器「邠」 (考83-2)	
094 武城		山東費県境内南武 城(文83-12)		武器 ○ (文83-12)	
095 鬲丘		古戴国=安徽宿県 北(黄)		武器「鬲丘」 (黄)	
096 鄆		山東鄆城東北(大 事表5)	金版「専爰」 (考学73-2)		
097 莒		[古莒国=山東莒 県(鄭、譚)]	刀錢「安陽」		
098 斉(臨淄)	87	山東淄博東臨淄 (譚)	刀錢 ○(製作場、 文72-5) 円錢「臚化」?	(製作場、文72 -5)	陶器(考61-6等)、(鉄器・骨器製作場、 文72-5)
099 高密		山東高密西(譚)		武器 ○(周存 6・32)	
100 即墨		山東平度東(譚)	刀錢「節墨邑」		
101 涿		河北涿県(考65-4、 文72-4)、[洮=山 東濮州南(鄭)]	方足布 ○		

地名	城址	所在地	貨幣	銅器	その他
102 武陽 (燕下都)	97	河北易県南(譚)	刀銭「明」(製作場、 考学65-1) 円銭「〃」	○(考88-7)武器「鄆王」(文8 2-8等)(製作場、考学65-1)	陶器(製作場、考学 65-1、考62-1等)、(鉄器製作場、考学6 5-1)
103 益昌		[漢志「涿郡益昌」 (鄭)]	方足布 ○		
104 武平		河北文安北(黄) [河南鹿邑西(鄭)] [河南北部(王)]	尖足布 ○	武器 ○(小校 10・103)	
襄平		遼寧遼陽西北(鄭) 〃 北(王)	方足布「纒坪」		
平陰		襄平の北=遼寧遼陽西北(鄭)	方足布「坪陰」 [「差陰」考84-2]		
105 郢	102	湖北江陵北(譚)	金版 ○	(製作場、文80 -10)	(陶器製作場、文80 -10)
106 安陸	104	湖北雲夢(譚)			陶器 ○(睡虎地)
107 咎奴 (高奴)		陝西安塞北(黄)	方足布(黄)?	武器 ○(三代 20-25)	
108 烏氏		甘肅固原南(譚)			陶器 ○(考与文83 -4)
109 雍	115	陝西鳳翔南(譚)		武器(双剣吉 下32) 容器 ○(考与 文83-6)	
110 美陽		陝西武功西(譚)			陶器 ○(考与文83 -4)
111 好時		陝西乾県(譚)			陶器 ○(〃)
112 雲陽		陝西淳化西北(譚)			陶器「雲」(〃)
113 咸陽	116	陝西咸陽西(譚)		武器 ○(録遺 584)	陶器 ○「咸原」「咸 邑」(製作場、考与 文80-3) 漆器「咸亭」「咸」 (睡虎地)

地 名	城址	所 在 地	貨 幣	銅 器	そ の 他
114 杜県		陝西西安東南(譚)			陶器「杜亭」(考与文81-1)
115 芷陽		陝西成案東北(譚)			陶器「茝」(")
116 麗邑		陝西臨潼東北(譚)			陶器「麗亭」(")
117 櫟陽	117	陝西富平東南(譚)		武器 ○(三代20・26、考与文83-3)	陶器「櫟市」(考学85-3)、(鉄器製作場、考学85-3)
118 頻陽		陝西富平東北(譚)			陶器 ○(陝西考古学会1)
119 臨晋		陝西大荔西(譚)			陶器 ○(")

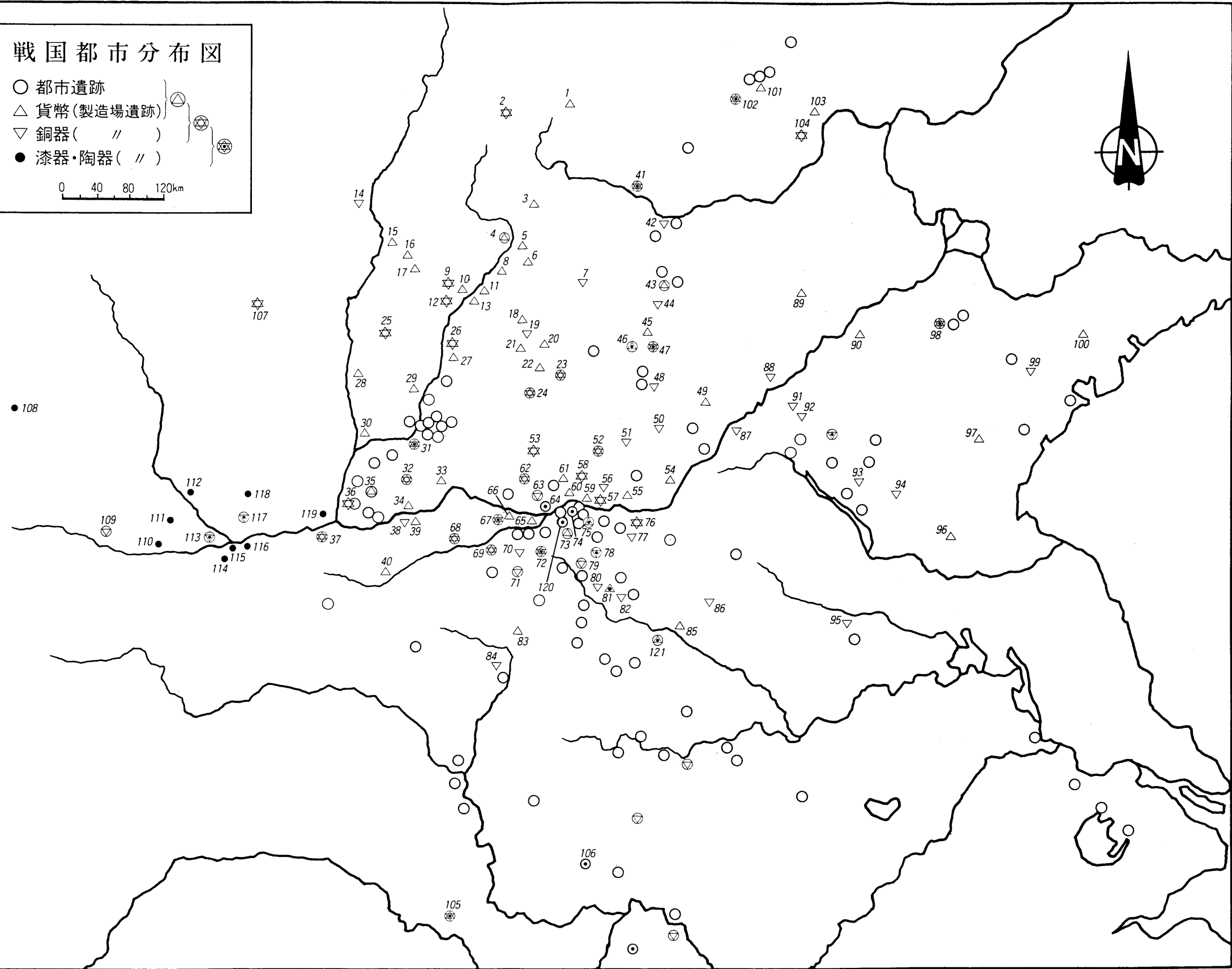
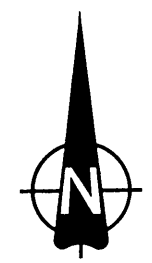
追加

120 格氏	47	河南滎陽北張樓村			陶器 ○ (中原81-1)
121 陽城	69	河南商水	方足布 ○「陽成」?		陶器「扶蘇司工」 (考83-9)

戦国都市分布図

- 都市遺跡
- △ 貨幣(製造場遺跡)
- ▽ 銅器(//)
- 漆器・陶器(//)

0 40 80 120km



2 - (3) 戦国出土文字資料地名表・補

(地名比定に問題があり、(2) 「戦国出土文字資料地名表」に取り上げなかったもの)

001 周是	方足布	隄上 (鄭→河南洛陽西南)
002 唐是	"	唐隄 (鄭→ " 東北)
003 邲	"	成 (鄭→ " 偃師西南)
004 安陽、安陽邑	"	安陽 (鄭→安邑の南=山西夏県西北／王→河北臨城南／文参56-2→山東曹県東)
安陽	三孔布	安陽 (鄭→秦地、史記秦本紀「昭襄王五十年、拔寧新中、更名安陽」／王→秦地、河南安陽)
安陽	銅武器	安陽 (考88-7→西漢汝南郡の安陽と同地)
005 戈邑	方足布	戈 (鄭→左伝杜注「宋鄭之間」、邲 (王→河南東部／文博87-2→代国)
邲	銅武器	代 (文博87-2→代国)
006 王氏	方足布	王官 (鄭→山西聞喜南)、王氏 (文参58-6→魯地／集刊2、中原85-3→魏地)
007 𢇛𢇛	"	莘邑 (鄭→[莘]河南陝州硤石鎮／文参58-6→ " 陝州莘原)、郛 (考65-4→山西朔県)、莘邑 (集刊2)
008 冥子	"	郛 (鄭→山西平陸東北)
009 平丘	"	平丘 (鄭→左伝杜注「陳留長垣県西南」、「平貝」「丘貝」「平丘貝」も同一地の鑄造)
010 貝	尖足布、方足布	丘貝 (鄭→同上／文84-11／集刊2／中原85-3→魏地／中原88-2→趙地から魏地)、貝丘 (沛丘；考88-2→山東博興東南)、齊貝 (文参58-6→齊地)、齊貝工 (文72-4)、文貝 (考75-4)、兪 (文81-11)、楡 (考65-4→山西楡次)
011 尹氏	方足布	尹氏 (鄭→河南宜陽西北)
012 尹陽	"	尹氏の南 (鄭→「尹氏」と同一地)
013 邲	"	來 (鄭→河南滎沢東／王→河南祥符)
014 邲	"	邲 (鄭→左伝杜注「陳留襄邑県東南」／集刊3、中原85-3 →韓地)、蔓邑 (文参58-6→河南蔓聚／集刊2)、郛？ (考65-4)
015 𣎵邑	"	城潁 (鄭→河南臨潁西南)
𣎵二新	橋形布	同上
016 朱邑	方足布	制=虎牢 (鄭)、邲 (王→国名、山東曲阜西南／文72-4／集刊3、中原85-2→韓地／中原88-2→山東鄆県)、邲邑 (文参58-6→鄆邑／文84-11)、制 (中原88-2→一説に河南滎陽西北)
017 壤陰	"	黑壤山北の陰地 (鄭→大事表「沢州府沁水県西北」)
018 邲氏	"	邲氏 (鄭→左伝杜注「周地」、括地志「鞏県西南」／文参58-6→河南鞏
邲氏半新	橋形布	県／集刊2／文84-12／中原85-3)、邲 (文72-4)、邲氏 (考75-4)
019 𣎵	方足布	𣎵 (踐) 土 (鄭→左伝杜注「鄭地」、彙纂括地志「滎沢県西北」、「踐王」

		「踐土王」も同一地／中原85-2→魏地）、土勾（文72-4）、土易（錢弊83-1）
020 其陽	方足布	箕の南（箕；鄭→山西太谷東南）
021 其北	"	箕の北（同上）
022 鄆	"	鄆（鄭→高士奇「太原府祁県西」）
023 鄆	"	鄆（鄭→陝西鄆県東）、鄆（考65-4、文72-4）、鑄邑（集刊2）
024 鄆	"	豐（鄭→陝西山陽県治）、鄆（文参58-6→陝西鄆県）、盟（考65-4／集刊3）、鑄（考80-1、考88-2→河南臨汝東南／中原85-3→魏地／集刊2）
025 張安	"	長安（鄭→漢初に都となる）
026 杜	"	杜陵（鄭→陝西長安南）
027 鄆氏	"	輔氏（鄭→陝西朝邑西北）
028 越	"	越邑（鄭→衛地）
029 木邑、木貝、邑貝	"	沐邑（鄭→宋都商丘）
030 母丘	"	母丘＝貫（鄭→括地志「曹州濟陰県南」）
031 封	"	封化＝封父（鄭→河南封邱西）
032 陶陽	"	陶陽（鄭→燕地）
033 右明新治	"	右易新剛（右易；鄭→燕地、易刀の右鑪）
034 邪	尖足布	邪（鄭→趙地）
035 成	"	成＝城（鄭→「任」の仮借、左伝杜注「直隸任県東南」、「商成」尖足布と同一地）
036 商成	"	商成＝商任（鄭→河北任県東南）
037 平州	"	平州（鄭→路史「汾州介休県西」、「平周」と同一地／王→山西介休西）
038 豕章	"	豕章（鄭→左伝杜注「河北大名滑県」／文65-1）、慮廐（考80-1→山西五台）、慮廐（集刊2）、膚虎（錢弊83-3→山西五台北／文86）
039 寿陰	"	平寿の北（鄭→平寿；趙地）
040 大箕	"	大箕（箕；鄭→山西大谷東南）
041 文陽	"	汶陽（王→山東寧陽東北）
042 封甫	小型空首布	封甫＝封父（鄭→河南封邱県西）
043 封丘	"	封丘＝封甫（鄭→同上）
044 封西	"	封西＝封甫の西地（鄭）
045 方市	"	方市＝防地の市（防；鄭→山東金郷県）
046 鄆	"	鄆＝費（鄭→山東魯台西南／王→山東費県西南）
047 函易	"	函易（鄭→函谷の南、河南靈宝）
048 濟	"	濟＝濟隧（鄭→水經注・京氏注「滎沢在滎陽東南、与濟隧合」）
049 安周	"	安周＝安定成周の民（鄭→「東周」空首布と同一地）
050 武	"	武＝武父（鄭→彙纂「大名府東明県」）

051 𠂔	小型空首布	戈（鄭→鄭宋の間の古国名、あるいは「武」の省）
052 邵丘	"	邵丘（鄭→河南濟源西）
053 洮金	鋭角方足布	洮（鄭→山西の洮水の近地）
054 聚	"	聚（鄭→大事表「絳州絳県東南」）、垂（集刊3）
055 安陰	橋形布	安邑の北（安邑；鄭→山西夏県）
056 垂	"	垂（鄭→魏地／王→山東曹県北）
057 亳	"	亳（鄭→河南偃師西）
058 上邙陽	"	上邙陽（鄭→秦地、比水上游の陽／王→秦地、河南中部）
059 下邙陽	"	下邙陽（鄭→秦地、比水下游の陽／王→同上）
060 杞	"	杞（鄭→秦地、彙纂「河南開封杞県治」）
061 上専	"	専＝薄（鄭→秦地、郡国志「名薄洛津、在今直隸肥郷鉅鹿之間」）
062 下専	"	同上
063 雁郷	"	雁郷（鄭→秦地、位置不明）
064 北九門	"	九門の北（九門；鄭→秦地、漢志「正定府藁城県西北」）
065 上苑	"	上苑（鄭→秦地、洛陽の上地）
066 阿	"	春秋の柯邑（鄭→秦地、山東陽穀阿城鎮）
067 宋子	"	宋子（文87-6→秦地、河北趙県）
068 齊陰	円錢	齊陰（鄭→濟水の陰地）
069 王人	"	王人（文65-1）、王化（集刊2）
070 城	"	城（文65-1）
071 井陘	銅武器	井陘（黄→趙地の井陘？）
072 喜	"	喜（黄→韓地？）
073 庠	"	庠（古文字7→趙地）
074 𠂔	"	𠂔（文83-9）
075 陽春	"	陽春（文博87-2→楚、魏交界の南陽一帯）
076 陵、墜	"	陵（小校10・29）（三代20・8）
077 甘城	"	甘城（小校10・26）（郡国志「河南郡甘城県」）
078 成陽	"	成陽（戦国策・韓策1→韓地）、城陽（戦国策・齊策6→山東莒県）
079 温	"	温（小校10・22）（河南温県）
080 不陽	"	邳陽（周存6・50）（邳→山東滕県）
081 高陽	"	高陽（小校10・24）（漢志「涿郡高陽県」）
082 皇宮	"	皇宮（双剣吉下28）
083 亳明	"	亳明（小校10・31）、高明（善齋古兵上・27）
084 餅	"	餅（癡盒58）
085 貫氏	銅容器	貫氏（三代3・43）
086 廐	"	廐（録遺522）
087 梁陰	"	梁陰（三代3・40）

3 秦・漢都市遺跡表

城 址 名	所在地	考古学的年代	規 模 m		城址内及び近辺の遺跡、出土遺物	地名比定		出 典
			東西	南北		秦	漢	
001 崞県古城	山西、渾源	漢	?		城内に陶・瓦片(漢)。周囲に墓地(西漢)		崞県	文80-6
002 榆次古城	”、榆次	”	約320	約400	城内より銅器、鉄器、陶器。墓(漢)		榆次	文参55-1
003 城居村古城	”、臨汾	漢～北朝	?	800				集刊6
004 禹王城中城	山西、夏県	漢	1500(北)	960(東)	瓦当、陶片、范、半兩錢(漢)		安邑	文62-4・5
005 漢魏故城	河南、洛陽	東漢～	3700(北)	4290(西)	城内に宮城、宮殿、苑囿60余		洛陽	文博88-1
006 河南県城	”、”	漢	1460	1400	建築址(漢)、井戸、穀物倉。鉄器、石臼、鉄工具作房(新中国395)		河南	考学59-2
007 漢王城	”、滎陽	秦末	1200	300-	城壁残存(北部は黄河にけずらる)。三棱銅鏃(漢王劉邦と楚霸王項羽の対陣の場?)			文73-1 (河南495)
008 霸王城			1000	400-				
009 頓丘古城址	”、清豊	漢、五代	周長3000		磚、瓦、陶片、磁片(漢、唐、五代)		頓丘	” 517
010 陰安古城址	”、”	漢、宋	周長3000		”(漢～宋)			”
011 内黄故城	”、内黄	”	?		地表下9mに建築址。陶片、磁片		内黄	”
012 唐莊古城址	”、新郷	漢	周長2000		城壁。磚、瓦片(漢)。城外に陶窯、墓地			河南527
013 張固城遺址	”、”	”	?		版築城壁残存		獲嘉	”
014 山陽城址	”、焦作	”	1850(北)	1350(東)	門9(河南520)。瓦当、陶片、銅器(漢)		山陽	中原86-3
015 賀村古城	”、沁陽	”	周長1300		銅鏃、瓦片(漢)			河南529
016 温県古城	”、温県	”	(20平方華里)		内城、外城あり。城内に陶・瓦片、磚(漢)。北城外に鉄器製作場遺址		温県	漢代疊縣

017 潁陽県故城	〃、襄城	西漢	周長3000		陶片(漢)		潁陽	河南602
018 古城遺址	〃、鄆城	漢	周長1100		城壁(漢)。漢代遺物			〃 612
019 召陵故城	〃、〃	〃	?		城壁(漢)。磚、瓦。城内に東周遺物		召陵	〃
020 昆陽故城	〃、葉県	〃	(75万㎡)		空心磚、貨布、大泉五十(新)		昆陽	〃 617
021 朗陵故城	〃、碓山	東漢	周長2800		城壁、漢代遺物		朗陵	〃 618
022 文城故城	〃、遂平	漢	周長6600		版築城壁、城内に漢代遺物			〃 619
023 宜春故城	〃、汝南	〃	(150万㎡)		磚、瓦片(漢)		宜春	〃 612
024 樂昌故城	〃、〃	〃	(33万㎡)		子母磚、空心磚、井戸枠、排水管(漢)、五銖錢			〃
025 仙居古城	〃、光山	〃	周長約3000		城壁殘存。銅器、鉄器、陶器、陶井(漢)			〃 641
026 宛城址	〃、南陽	〃	周長約8200 (1000-北)、(2000-東)		城壁殘存。製鉄場(文65-7、60-1)、半兩錢範(考64-6)。銅鑄(戦国)、瓦片(漢)、堀、陶窯、水道、井戸(文60-1)		宛県	〃 650 (文60-1)
027 西鄂城址	〃、〃	〃	周長約1300		陶片、石器、鉄器、鏃		西鄂	河南650
028 趙店古城	〃、内郷	〃	周長約3000		磚、陶・瓦片(漢)、金餅		鄆城	〃 656
029 冠軍故城	〃、鄧県	〃	周長2000		石華表、磚、陶・瓦片(漢)			〃 660
030 光武城遺址	〃、桐柏	〃	周長300		城壁殘高3m。瓦片(漢)、銅洗、鏃。墓(漢)			〃 664
031 博望故城	〃、方城	〃	周長2100		版築城壁。磚、瓦片、陶井、鉄器(漢)		博望	〃 667
032 曲阜漢城	山東、曲阜	西漢末	2560(北)	1880(東)	道路、建築址、製鉄場。陶器、瓦、瓦当、磚、半兩錢、五銖錢。墓地		魯県	魯故城 四次年会
033 益都侯城故址	〃、寿光	漢	?		城内より瓦礫、銅洗、銅・石范(漢)、「大布黄千」			文85-3
034 昌陽県古城址	〃、文登	〃	?		城外に墓地(漢)		昌陽	考学57-1

城 址 名	所在地	考古学的年代	規 模 m		城址内及び近辺の遺跡、出土遺物	地名比定		出 典
			東西	南北		秦	漢	
035 東武故城	山東、諸城	漢	?		「城周三十里」(水經注)。周圉に墓地(漢)		東武	考87-9
036 東安故城	”、沂水	”	?		貨幣、陶器、鉄器(漢)。城北に墓地(東漢、「軍假司馬」印・考86-1)		東安	考与文87-6
037 柞城故址	”、蒼山	戦国、漢	周長4000		城内より五銖錢、大泉五十、貨布、「千秋万歳長楽」瓦当、「荼大夫之璽」銅印(戦国)			文84-8
038 蘭城古城	”、棘莊	漢	?		北、東城壁残存、城内に墓地(西漢晩)			文叢9
039 石戸城遺址	”、徐州	”	約500	約300余	堀。陶・瓦片(漢)、銅鏃			考60-3
040 離孤城	”、濰沢	漢～唐	?		城壁残存		離孤	考通58-2
041 城父集故城	安徽、亳県	秦末	?		城壁あり	城父	城父	文78-8
042 朱房村古城	河北、北京	漢	周長約4里		城内に鉄劍、刀、鋤、鏡(漢)。磚、瓦、五銖錢(漢・考59-3)			文参55-1
043 寶店土城	”、”	戦国末、西漢	約200	約960	内城あり。門6、東西大路あり(考63-3)。城内に陶片(戦国・漢)		良郷	文59-9
044 広陽城	”、房山	東周、漢	(600)	(600)	城壁一部残存。陶片(東周・漢)		広陽	考63-3
045 長溝土城	”、”	漢	360(南)	500(西)	陶・瓦片、瓦当。あるいは戦国、漢(文59-1)		西郷	”
046 東壁陽城	”、保定	東漢・五代	約200(北)	約100(東)	陶・瓦片、磚、鉄器、銅帶鉤、半兩錢、貨泉、五銖錢			文59-9
047 北城子村古城	”、平谷	漢	220	240	陶片。窯址、漢墓		博陸	考62-5
048 泉州古城	”、天津	”	500	600	南壁に城門。城外から「泉州」陶文		泉州	三十年
049 東平舒古城	”、”	”	約500	約500			東平舒	”
050 伏犄城	”、黄驊	”	520?	510	城壁残高5m。「武市」陶文		章武	考65-2

051 講武城	河北、磁県	戦国、漢	1100	1150	城内より磚、瓦、陶器、鉄器		武城	三十年
052 潁河尖古城	遼寧、丹東	漢	約500	約600	陶・瓦片、五銖錢、「安平樂未央」瓦当(考87-2)		安平	考80-6
053 西胡素台古城	〃、建平	西漢	300余	300余	陶器、瓦片(西漢)、「安樂未央」瓦当、明刀、方足布、半兩錢(漢)、五銖錢、甕棺墓(漢)		薊県	考87-2
054 扎秦營子古城	〃、〃	〃	125	175	城内より瓦、磚、陶片(漢)、瓦当、明刀、方足布、五銖錢、銅鏃、鉄器			〃
055 右北平郡址(黒城)	〃、寧城	秦、西漢、新	2500(北) (1800)	2000 (800)	城内に磚、瓦、陶器。鑄錢作房。瓦当(漢)、「假司馬」「部曲將」印、鉄器(漢)、銅範、封泥。北壁外に土台		平剛	文85-4 (文82-2)
056 塔琪營嶂城	〃、昭烏達盟	漢	170 (170)	170 (160)	門、堀。城内中央に円形土台。陶片、瓦礫(漢)			文85-4 (北方87-2)
057 七家嶂址	〃、〃	〃	200	150	門、堀、台基。陶器、瓦(漢)。鉄器、五銖錢等(北方87-2)			〃
058 北山根(東城)嶂址(西城)	〃、〃	〃	100 100	150 150	西城三面に角樓、土台。陶器、瓦(漢)。銅鏃、五銖錢、半兩錢(北方87-2)			〃
059 慶華古城	黒竜江、慶華	戦国、漢	周長約500		門。城内に遺跡(戦国早期～西漢末)			考88-7
060 鄧城	湖北、荊州	漢	1000	1000	建築址。陶器(漢)、王莽錢、五銖錢(江漢86-1)		鄧県	江漢80-1
061 豊樂鎮古城	〃、鍾祥	〃	?		城壁未発見。磚(漢)、瓦(戦国、漢)、陶井圈殘片		竟陵?	〃
062 東陽(東城)古城(西城)	江蘇、盱眙	戦国末～秦、漢	933(南) 862(南)	838(東) 838(東)	東城西北に官署(秦銅權、陶・瓦片、瓦当、磚、五銖錢)。蠡鼻錢、郢爰、秦半兩錢。城外に墓地(戦国末、西漢末)	東陽	東陽	五次年会49
063 項王城	〃、〃	漢	?		磚、陶・瓦片(漢)			考63-1
064 霸王城	〃、泗洪	〃	約1000	約1300	城内に瓦、瓦当、陶器、窯址			考64-5
065 越城遺址	〃、洪沢	〃	(約500)	(約200)	城壁不明。陶片(漢)			〃
066 利成県故城	〃、贛榆	〃	500	500	陶・瓦片		利成	考64-1

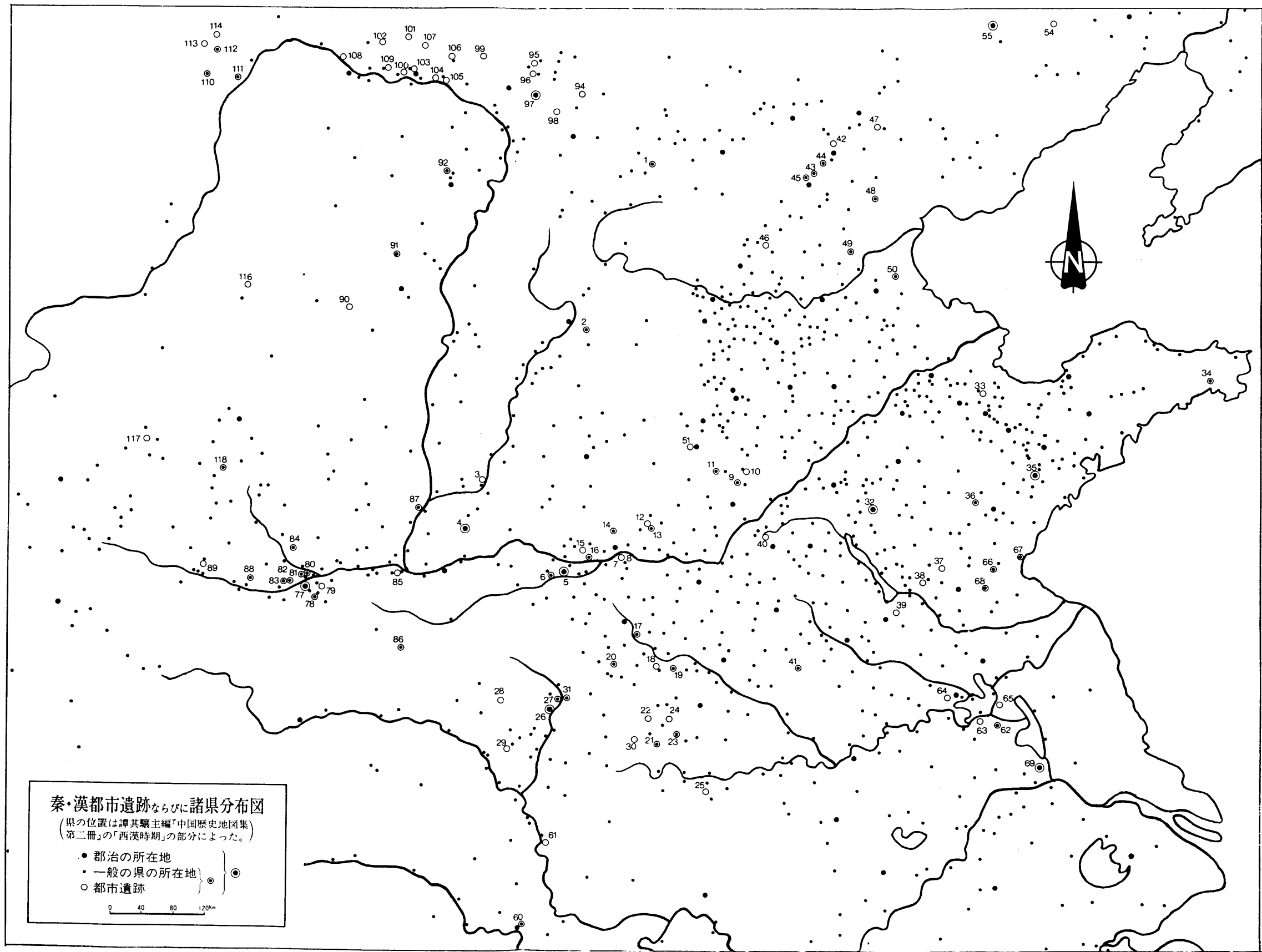
城 址 名	所在地	考古学的年代	規 模 m		城址内及び近辺の遺跡、出土遺物	地名比定		出 典
			東西	南北		秦	漢	
067 塩倉城	江蘇、贛榆	漢	?		城壁残高3~5m。陶・瓦片(漢)		贛榆	考62-3
068 羅莊古城	”、東海	”	約500余	約500余	城内に土台。陶・瓦片(漢)、三棱式銅鏃、銅錢		東安	考64-1
069 広陵城	”、揚州	”	?		城外に墓地(漢)		広陵	文87-1
070 鄭陽城址	江西、都昌	”	(約1 km ²)		城外南に城堡、西・北に墓地(東漢)。磚、陶・瓦片、「長楽未央」(三十年)、「万歳」瓦当、銅鏡、五銖錢、貨錢		鄭陽	考83-10
071 昌邑古城	”、新建	”?	約600	約400	門。陶・瓦片、磚、鉄剣、刀、銅鏡		海昏?	考60-7
072 鄱湖遺址	湖南、衡陽	(漢)	?		東方に春秋晩～西漢早の墓地			考84-10
073 春陵故城	”、寧遠	西漢	約200	約160	門、堀、建築址。陶・瓦片(西漢前)		春陵	考78-4
074 冷道故城	”、”	漢	130(北)	180(東)	門、堀。城内に陂地、土台、陶片(東周)、大量の陶・瓦片(漢)		冷道	”
075 洮陽故城	広西、全県	”	約300	約100	山城(高20m)。門。陶・瓦片(漢)		洮陽	”
076 城前漢城	福建、崇安	”	550	860	堀、土台(宮殿)、居住址、門、道路、排水口、製鉄場。城外に居住址、製鉄場、陶器製作場、墓地	東冶	冶県	文85-11
077 漢長安城	陝西、西安	西漢	6250(南)	5940(東)	城壁残高7m以上、城門12、堀、城内に大道6、建築址(未央宮前殿340×150m、武庫)、陶管道。城外にも建築址(上林苑の離宮、礼制建築)		長安	文81-1
078 杜陵邑	”、”	”	(1100)	(500)	建築址(漢)。磚、瓦片、陶器、玉器(西漢)		杜陵	文叢6
079 芷陽城遺址	”、臨潼	戦国晩～西漢晩	?		陶器、鉄器、瓦、瓦当、陶水道、井圈、半両錢、五銖錢、王莽錢		芷陽	考与文87-4
080 長陵邑	”、咸陽	西漢	1300-(北)	2040(西)	門。城内に建築址(漢)、半瓦当。城外南辺に長陵、東に陪葬墓。「五万五千七戸(179460人)」(漢志)		長陵	考87-1

081 安陵邑	”、”	”	1643	705	門、「安邑瑠柱」瓦当、瓦片。城外南に安陵、東南に陪葬墓(文叢6)		安陵	考81-5
082 平陵邑	”、”	”	(867)	(380)	建築址(漢)、鵝卵石、磚、瓦片、陶器、鉄器、五銖銭(西漢)「王氏」銅鼎、「長生無極」瓦当、陶窯、王莽銭范、製骨場(考与文82-4)		平陵	文叢6
083 茂陵邑	”、興平	”	(1500)	(700)	建築土台、磚、瓦片(漢)、玉器		茂陵	”
084 雲陵邑	”、淳化	”	370	700	「三千戸」。門、道路、水道管、窯。磚、瓦、「長生未央」「衛」等瓦当、五銖銭、銅器		雲陵	考与文82-4
085 華倉倉城	”、華陰	戦国、漢	1120	700	陶水道、柱礎石、建築址(倉庫)、道路。磚、瓦、「京師倉当」「長生無極」等瓦当。水池、水井、水溝。生産工具、兵器、銭幣			考与文81-3 ” 82-6
086 丹鳳県古城	”、丹鳳	秦、漢	2000	600	瓦等建築資材	商県	商県	” 81-3
087 夏陽城	”、韓城	”	1750	1500	門、建築址、磚・瓦窯(秦漢)。城外に鉄器製作場(生産工具)、墓地(秦漢)	夏陽	夏陽	” 87-6
088 岐陽城	”、扶風	戦国～北魏	850(北)	500(西)	堀。城内に陶・瓦片、磚片、瓦当(秦漢)、三棱銅鏃。城外に陶窯(漢)	美陽	美陽	文博84-3
089 南古城 (古城台)	”、鳳翔	西漢	254(北)	287(東)	磚、陶・瓦片(秦漢)、井戸、灰坑			考与文80-4
090 楊橋畔古城	”、靖辺	”	(10余万㎡)		磚、陶・瓦片。王莽銭埋蔵。銅器、銅印(西漢)、「大泉五十」鉄範、鑄銭場(文博88-3)			” 87-5
091 古城灘漢城	”、榆林	東漢晚	?		城壁残存、瓦片散布。陶器、半両銭、五銖銭、三棱銅鏃。附近に墓地(東漢)		亀茲	文76-2
092 広衍故城	”、準格爾旗	戦国～北魏	87-(北)	390-(東)	城内に建築址、製作場(鉄渣、泥・石范、半両銭、五銖銭、大泉五十、鏃)、陶・瓦片、瓦当。城外に墓地(戦国、西漢)	広衍	広衍	文77-5

城 址 名	所在地	考古学的年代	規 模 m		城址内及び近辺の遺跡、出土遺物	地名比定		出 典
			東西	南北		秦	漢	
093 克里孟营村古城	内蒙、集寧	西漢	約500	約200	城内に陶片(漢)、建築址。城外に匈奴墓地。西漢雁門郡址(文参57-7)			文参57-4
094 左尉子村古城	”、涼城	漢魏～隋唐	約800	約300	城内に陶片、瓦当、銅牌(南北朝)。西北一帯に墓地(漢魏)			”
095 塔布秀村漢城	”、呼和浩特	西漢	850	900	城内に小城(230m四方)。陶・瓦片、瓦当(西漢)			考61-4
096 美岱古城 (二十家子古城)	”、”	”	(23500m ²)		内城内に大型建築址。陶・瓦片、瓦当、五銖錢、半兩錢、封泥、鉄器、鉄甲片。窯址、鉄器製作場(考75-4)			文61-9
097 土城子南城	”、和林格爾	漢～北魏	505- (670)	535 (655)	陶・瓦片、瓦当、鉄器、刀錢、半兩錢(漢)、五銖錢、陶文。窯址、建築址、窖穴(文61-9)		成案	集刊6 (文61-9)
098 榆林城漢城	”、”	漢	?		西南に和林格爾壁画墓(「武成図」「莊園図」)		武成	考与文85-1
099 廟溝古城	”、武川	”	約180	約200	門、西北角に土台。城内に陶片(漢)、銅鏃、建築址(金元)			考通58-2
100 烏拉山(内城) 里城堡 (外城)	”、包頭	”	80	87	城壁残高0.5m。門、外城外に堀、内城内に建築址、陶片(漢)			考59-3
			?					
101 増隆昌古城	”、”	”	240	315	漢代遺物(北朝時も使用)			内蒙3
102 大余太古城	”、”	”	?					”
103 孟家梁古城	”、”	”	?					”
104 麻池古城	”、”	”	?		(綏陽県か沃陽県?)			”
105 古城湾古城	”、”	”	?				塞泉	”
106 城梁古城	”、”	”	?					”

107 梅令山古城	内蒙、包頭	〃	?		陶片(漢、魏)		石門	考87-1
108 公廟溝口 古城堡	〃、烏拉 特前旗	〃	140	140	城壁残高2m。磚、陶・瓦片(漢)			文參56-9
109 哈德門溝 古城堡	〃、〃	(秦、漢)	約150(南)	約250	北郊に秦漢長城。城壁残高3m。門、建築土台。磚、陶片、 陶器、五銖錢			文參65-7
110 陶升井(内城) 古城(外城)	〃、磴口	西漢	約118 約100-	約118 約100-	陶・瓦・磚片(漢)、瓦当、排水陶管、三棱鉄鋌鏃、五銖錢 (西漢)、大泉五十。半兩錢、城外に墓地(西漢末~東漢初・ 考65-7)		三封	考73-2
111 布隆淖古城	〃、〃	漢	約450	638(東)	城内に陶・瓦・磚片(漢)、石鏃・磨・榱(漢)。冶鉄遺址		臨戎	〃
112 保爾浩特古城	〃、〃	西漢	250	200	門。城内に陶・瓦・磚片(漢)、五銖錢、三棱鉄鋌鏃、冶鉄 遺址		竊渾	〃
113 鷄鹿塞石城	〃、〃	漢	68.5	68.5	石城。門、城内に陶・瓦・磚片(漢)			〃
114 大垣溝小石城	〃、〃	〃	22.5	22.5	石城。門、城内に陶・瓦片(漢)			〃
115 紅慶河(内城) 古城(外城)	、伊盟 郡王旗	〃	50 ?	50 ?	内城内に建築址、陶片。城外墓地(西漢中期)			文58-3
116 張家場古城	寧夏、塩池	秦、漢	1200	800	東門辺に牲畜骨格、陶片、貨幣(秦漢)。城外西南に墓地(漢)。王莽錢、瓦、瓦当(考与文81-4)	昀衍	昀衍	文88-9
117 古城郷城	〃、固原	〃	800	500	堀。城内に瓦、瓦当、銅器、陶水管(漢)		蕭関	五次年会
118 彭陽古城址	甘肅、鎮原	(漢)	?		東北の墓より「彭陽」銅鼎(西漢)		彭陽	文84-4
119 八角城(外郭) (内城)	〃、夏河	漢	周長1080- 〃 1960		礎石、石臼、陶片(漢-)、磁片(宋-)			考与文86-6
120 顯美県古城	〃、永昌	(漢)	?		西北に墓地(東漢)		顯美	考与文85-1
121 大湾古堡	〃、額濟 納旗	漢	250	350	肩水都尉の所在地。堀、郭、塢あり。木簡1500余枚、銅印、 銅鏃、鉄器、竹木器等			考60-1

城 址 名	所在地	考古学的年代	規 模 m		城址内及び近辺の遺跡、出土遺物	地名比定		出 典
			東西	南北		秦	漢	
122 南向陽古城	青海、剛察	新	90	120	門			考84-3
123 立新古城	“、”	“	周長140					“
124 北向陽古城	“、”	“	400	300	門、建築址。城内に道路、広場。陶片、五銖銭			“
125 尕海古城	“、海晏	“	435	463	門、広場、建築址。陶片、五銖銭、銅鐘			“
126 三角城	“、”	“	659(南)	630(東)	西部に官署土台		西海	五次年会
127 鎮海堡古城	“、樂都	漢	380	300	建築址。城外に墓地(漢)		臨羌	“
128 唐格木古城	“、共和	“	200	200	陶片(漢)、五銖銭			“
129 敵道 (主城) 故城 (子城)	四川、榮經	東漢	400 300	375 270	堀、道路。城内に陶・瓦片・磚片(漢)、陶器。東面に耕地?		敵道	“
130 雒城	“、広漢	“	2400	1800	磚(「雒城」「雒官城壁」)。填土中に陶器、瓦、瓦当、五銖銭(東漢)		雒県	“
131 漢土城	“、西昌	漢	500?	500?	城外に墓地(東漢)			集刊3

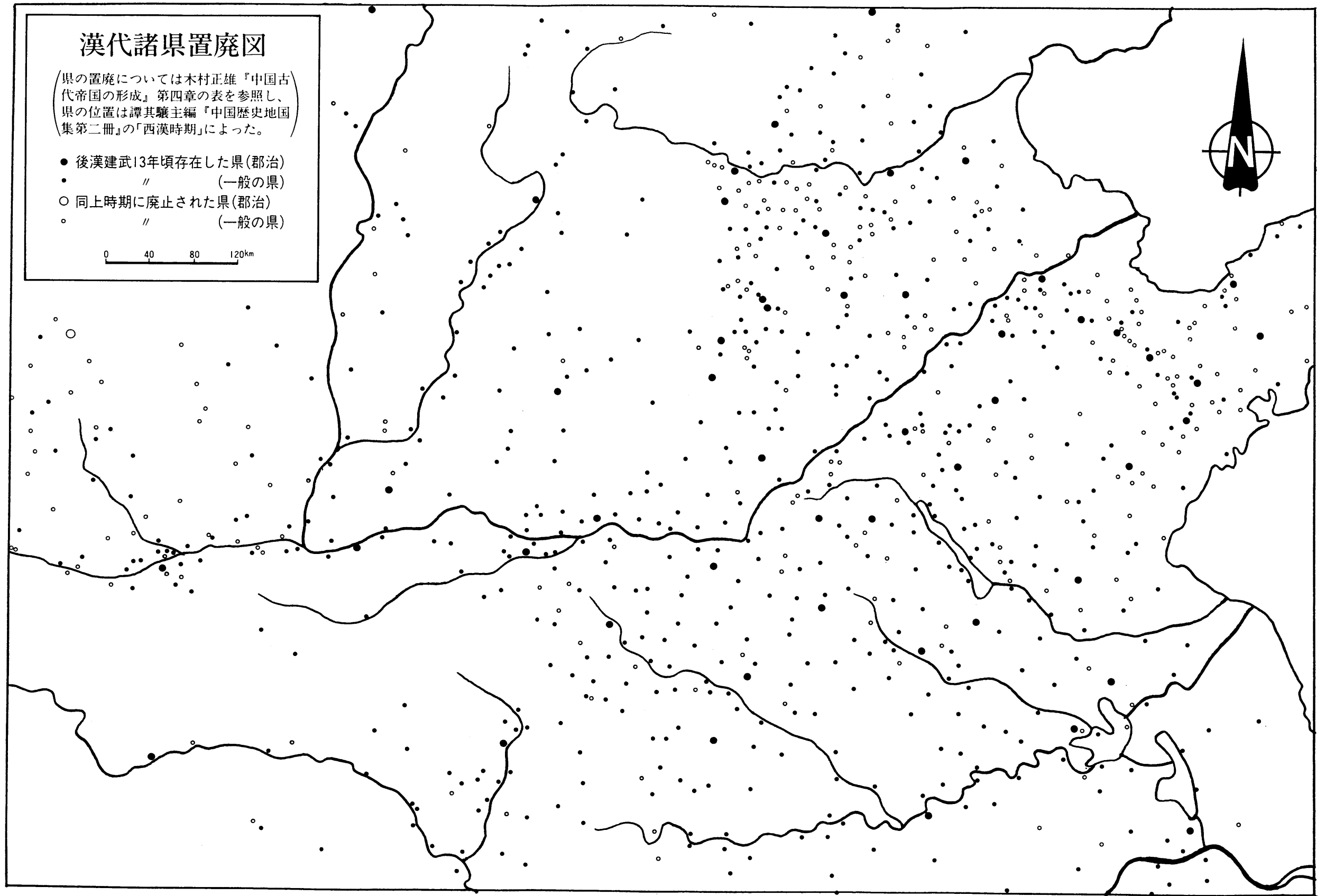
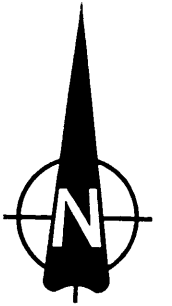


漢代諸県置廃図

(県の置廃については木村正雄『中国古
代帝国の形成』第四章の表を参照し、
県の位置は譚其驤主編『中国歴史地図
集第二冊』の「西漢時期」によった。

- 後漢建武13年頃存在した県(郡治)
- (一般の県)
- 同上時期に廃止された県(郡治)
- (一般の県)

0 40 80 120km



都市遺跡調査書目一覧

文物参考資料 1955-1～文物 1989-10
考古通訊 1955-1～考古 1989-10
考古學報 1(1936)～同 1989-4
文物資料叢刊 1(1977)～同 10(1987)
文物集刊 1(1980)～同 3(1981)
考古學集刊 1(1981)～同 6(1989)
中國考古學會第一次年會論文集(1980)～同第五次年會論文集(1985)
河南文博通訊 1980-1～中原文物 1989-3
華夏考古 1987-1～同 1989-2
考古與文物 1980-1～同 1989-4
文博 1984-1～同 1989-5
江漢考古 1980-1～同 1989-3
東南文化 1(1985)～同 1989-1(ただし同 1988-6 未見)
內蒙古文物考古 1(1981)～同 4(1986)
北方文物 1987-1～同 1989-4
北京文物考古 1983
東北考古與歷史 1983
湖南考古輯刊 1(1982)
侯馬盟書(文物出版社、1976.12)
漢代壘鑄(文物出版社、1978.12)
文物考古工作三十年 1949-1979(文物出版社、1979.11)
河北省出土文物選集(文物出版社、1980.5)
曲阜魯國故城(齊魯書社、1982.9)
新中國的考古發見和研究(文物出版社、1984.5)
河南考古(中州古籍出版社、1985.10)・付録一

著錄等略稱一覽

河南	河南考古、楊育彬、1985、中州古籍出版社
河北	河北省出土文物選集、河南省博物館等、1980、文物出版社
漢代鑄錢	漢代鑄錢、河南省博物館、1978、文物出版社
考古	考古
考古通	考古通訊
考古學	考古學報
考古與文	考古與文物
江漢	江漢考古
侯馬盟書	侯馬盟書、山西省文物工作委員會、1976、
古文字	古文字研究
三次年會	中國考古學會第三次年會論文集・1981、1984、文物出版社
四次年會	中國考古學會第四次年會論文集・1983、1985、文物出版社
五次年會	中國考古學會第五次年會論文集・1985、1988、文物出版社
三十年	文物考古工作三十年、文物編集委員會、1979、文物出版社
山西	山西出土文物、山西省文物工作委員會、1980
新中國	新中國的考古發現和研究、中國社會科學院考古研究所、1984、文物出版社
睡虎地	雲夢睡虎地秦墓、1981、文物出版社
陝西考古學會1	陝西省考古學會第一屆年會論文集（考古與文物叢刊3）、1983
錢幣	中國錢幣
中原	中原文物
中原83特刊	中原文物1983年特刊
內蒙	內蒙古文物考古
文	文物
文參	文物參考資料
文叢	文物資料叢刊
文博	文博
北方	北方文物
魯故城	曲阜魯故城、山東省文物考古研究所等、1982、齊魯書社
王	王毓銓、我國古代貨幣的起源和發展、1957、科學出版社
奇觚	奇觚室吉金文述、劉心源、1926
黃	黃盛璋、試論三晉兵器的國別和年代及其相關問題、考古學報1974

三代	三代吉金文存、羅振玉、1936
周存	周金文存、鄒安、1916
小校	小校經閣金文拓本、劉体智、1935
善齋	善齋吉金錄、劉体智、1934~5
双劍吉	双劍謠吉金圖錄、于省吾、1935
大事表	春秋大事表、顧棟高
譚	譚其驤、中国歷史地圖集第一冊、1982、地圖出版社
癡盒	癡盒藏金、李泰棻、1940
鄭	鄭家相、中国古代貨幣發達史、1958、三聯書店
綴遺	綴遺齋彝器款識攷釈、方濬益、1935
錄遺	商周金文錄遺、于省吾、1957